砂塵りのケーナ

由一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
砂塵りのケーナ

【Ｎコード】
Ｎ０８５３Ｖ

【作者名】
由一

【あらすじ】

砂漠の国の少女ケーナと、一人の少年の出会いと別れの物語。

長編ファンタジー小説です。
ごく稀に挿絵あり。各章短めです。

少年は砂漠を行く

大きな皮帽子をかぶったその少年は一人巻き起こる砂嵐の中を歩いていた。
ただ真っ直ぐ、目的の地へと向かう。少しでも方向を歪めれば、そこには死が待っている。

広大なクァマトラ砂漠は、人の命をこれまでにも数多く飲み込んできた。
昼の暑さは著しく水分を奪い、夜の寒さは体を凍えさせ永遠の眠りを誘う。
住まう魔物達は凶暴で人の肉を好む者もいる。

少年が一人で入るには、ここはあまりにも危険な場所だった。
誰が見ても無謀他ならなかった。手持ちは、沢山の水筒と中くらいのずたリュックだけである。

汗がポタポタとこぼれ落ちる。
眩暈がする、熱気で目の前が揺らめく。

あとどれくらいで到着するのだろう？
想像以上の距離だ。このままでは、干からびてミイラにでもなってしまいそうだ。
ここで野たれ死ぬなんてたまったもんじゃない。蜂に刺されて死ぬくらい嫌だ。
少年は、沸騰しそうな脳で思い考える。想像でもしていないとこの延々とループしているような光景に気をくるわせられかねなかっ

た。

見える物は、

砂
砂
砂
砂
砂
オアシス
オアシス？

少年は目を輝かせ、そしてそれをこすった。幻ではない。
退いた砂嵐から現れたのは、美しい大きな泉であった。

近づいても、蜃気楼のように消える事は無い。
少年は嬉しさ余って叫んだ。

「やったぜ！　本物のオアシスだ！」

近づく影（前書き）

オアシスでひと休みする少年のところにやってきた者は……？

近づく影

大きな湖の周囲は、この砂漠では珍しく植物が茂っている。
生えている大きなカヌキの木陰に、身に着けていた物を全て脱ぎ置きパンツ一丁の身軽になった少年は、そこにある美しい青の水面にザブンと飛びこんだ。

この焼かれるような砂漠において、この小湖の水は冷たさを保っていた。
少年の体の熱を緩やかに奪い、至福の時を与えた。

「ぷはー、幸せだぁ。夢見たいだぁ。」

声に出すほど少年は浮かれていた。去年の冬にコーサカルの温泉に入った時よりも、ずっとずっと気持ち良い。ずっとここにいたら最高だなぁと思ったが、そうもいかないのが残念だった。暫くしたら、また歩き出さねばならない。水から出した顔からふぅとため息が漏れる。

ふと、木々の向こうの砂漠を見ると何やら動く者が見えた。
馬か何かに人が乗っている。しかも、こちらに向ってくるようだ。

少年は、慌てて岸に泳ぎ、着くとサッと服を着て向かってくる者を木陰から待ちかまえる。こんなところで、人に会うのは幸か不幸か。危険な者でないことを少年は願った。

フードを被ったその人らしきものは、オアシスつくと馬から降りる。

そして、水面に近づくと着ていたそのフード付きのコートをバッと脱ぎ去った。

少年は眼が良かった。遠目だったが、その身なりをよく見る事が出来た。

それだけに、見えるものがあまりにも刺激的すぎた。

「わわわわわわわわ！」

少女との出会い（前書き）

少年は、オアシスに入ろうとする少女を慌てて引きとめる。

少女との出会い

少年は声を上げた。
目の前で少女が服を脱ごうとするのを、またその後の状況を放っておけるほど少年は助兵衛では無かったのだ。それに、ここで声を出して制止しなければ、いざ話かける時に疑われてしまうのも不都合であった。

少年の出した声は、空色の美しい髪を生やすその少女に届く。
少女は「はっ！？」と声を出すと慌てて服を着直した。

「誰っ！？」

少女は、剣を携えていた。それを鞘から抜くと、ずんずんと湖沿いに少年に近づいてくる。
対して、少年は華奢で武器は持たずま丸腰だった。しかし、少年は逃げる事はしなかった。逃げれば逆に怪しまれるからと言うのもあるが、話しかけようと思っていたから逃げなかった。ただ、剣を持った少女が間近に近づくとやはりちょっと怖かった。開いた両手を左右に振って必死に説得に出る。

「わわわわわ！　僕は怪しいものじゃありませんっ！」

「貴様、何者だ！？」少女は、少年を睨みつける。

「僕は、見習いの冥術師です。今修行の旅をしてるんです！　たまたま、オアシスに辿り着いて、それで……たまたま……たまたま

なんです！　別に、敵意は無いです！　本当です！　ひゃあ！」

少女はそれを聞くと、剣を一筋ブンと空振りさせた後に鞘におさめた。

そして、さっきまでの険悪な顔とは打って変わって可愛らしい笑顔を見せた。

「なぁんだ、そういうことか。まあ、あんな大声を出すあたり悪い奴じゃ無いとは思ってたけど。ふーん、冥術師の修行か。」

少年はホッと肩を撫でおろす。話の分かりそうな人でよかったと思った。

「はい、この度は砂漠の国デルアラスに＜律者の試練＞を受けに行く途中なのです。」

「そっかノルマーダ神殿に行くんだね。君、運が良いね！　私、あそこの国から来たんだ！　よかったら馬に乗せてあげるよ。」

「ホントですか！？」

「うん、その荷物なら2人乗っても大丈夫だし。それに、君をこのまま砂漠に放っておくのは心配だからね！」

敵ではない事を知ると、少女は非常に親切だった。

少年は、丁寧におじぎをすると一緒に馬の停められている場所に向った。

運命の咆哮（前書き）

少年と少女は互いの名を知る。
運命の歯車は回りはじめる。

運命の咆哮

馬に乗る前に、少女は少年に名を尋ねる。
少年は、顔を赤らめて照れくさそうに答えた。

「僕は、レイルって言います。　生まれは遠く西のバリアルハンです。」

「へぇ、随分と遠くの人なんだね。　私は、ケーナって言うんだ！」

「ケーナさんですか……よろしくお願いします。」

ケーナは、少年レイルのあまりにくそまじめな態度に思わず笑ってしまった。
かわいい奴だなと思った。だからちょいとからかいたくなる。

「別に、そんな丁寧に言わなくてもいいし。軽ーくケーナって呼びなさいな。レ・イ・ル君！」

「は、はい！」

「ほら、試しに呼んでみなさいって。」

「え？　ええと、け、ケーナさ……」

「さんはいらないの。はいもう一度！」

その時、ブルルーンと馬が鳴いた。
そして蹄を乱雑に動かすと、ケーナはレイルをおちょくるのをやめた。

「ああ、ごめんごめん！　あんたの紹介がまだだったね！」

「その馬は……サンドラブ？」

「へーっ、知ってるんだ！　この馬は背中に水を貯められるから、こうやって砂漠を長々走っても大丈夫なんだよね。　んで、この子の名前はガファルって言うんだ。おとなしくて優しい子なんだけど、ちょっとさびしがり屋なんだよ。だから今みたいに無視されると怒るわけ。」

ケーナがそう言って脇腹を撫でると、ガファルはその通りですよと言うようにブルルンと鳴いた。
馬に殆ど乗った事のないレイルは、このサンドラブに乗せてもらえる事に対し胸が高鳴った。

「これに乗せてもらえるんですか。それにしても大きいなぁ。」

「そうでしょ？　そうでしょ？　そこいらの国の小さな馬よりずっと頼りになるんだから！　ささ、私が前に乗るから、レイルは後ろに……そのへんに乗って。」

「う、うん。」

レイルは恐る恐る、馬に乗りにかかる。
想像以上に高く感じたが、いざ乗ってみると安定感があり気が落

ち着いた。
ケーナはレイルが乗るのを見届けると颯爽と足場を駆けのぼり、彼の前に飛び乗った。

「よし、じゃあ出発しようか！　オアシス入り損ねたけど。」

「は、はい！」

少年レイルとケーナはオアシスで運命の出会いをした。
後々に巻き起こる、悲しい運命への旅が馬の嘶きと共に、今始まった。

砂漠の大国へ（前書き）

砂漠を疾走するサンドラブ。
遂に王国への入り口が見えて来た。

砂漠の大国へ

＞ｉ２８２５４―３６５３＜

砂漠を走るサンドラブの走りは早い。吹き付ける風は暑さを和らげる。
少年レイルは乗っている間振り落とされないようにケーナにしがみついていた。
女の子に触るのは初めてだったから最初は少し戸惑ったが、しがみついたケーナのおなかは暖かくてやわらかなものだった。そして、何だかとてもいい匂いがした。だから心ははいつしか落ち着き、こうしている事に心地よさすら感じた。

「もうすぐだよ！　もうすぐ街の外壁が見えてくるはずだから。ほら！」

ケーナが振り向いて言った時には地平線の向こうに出っ張ったものが見え始めた。
そしてそれがどんどん近付くにつれて大きく高くなっていく。
レイルはあそこが自分の目指していたところなのかと心躍った。

王国デルアラス。

クァマトラ砂漠に悠々と構える、３０００年の歴史を持つ大国にして強国。
３０万の砂漠の民が住み、リヒト＝ファアール王がそれを治める。

馬がその走る足を緩めたときレイルの前方には王国への入り口が口を開けていた。
中からは、人々の出す色々な音が流れてくる。

賑やかな街並み（前書き）

門の入ってすぐはデルアラスの商業地だった。
賑やかな街並みを２人は通り過ぎて目的地の神殿へ向かう。

賑やかな街並み

馬に乗った2人が門をくぐると、そこには賑やかな街の風景が広がっていた。

爽やかな白煉瓦の建物が太陽に照らされてずらりと立ち並び、道端には様々な露店が軒を連ねている。

そして、人々が、馬が、猫が、和気あいあいとあちらこちらを歩いてものを売り買いしていた。

「どう？　なかなか良い街じゃない？」ケーナがレイルに振り返らずに聞く。

「うん、僕の住んでたと事は違うけど。すごい人だね！　何だかお祭りみたいだ。」

「ふーん、レイルの国は寂しいとこなんだね。この街ではこれが普通だよ。色んな国から色々な目的で人がやって来るからね！　許可さえ取れば誰でも路店をせるから、他の国から来た人が結構商売してるんだよ。」

馬は、悠々と人ごみを歩いて行く。辺りには食べ物か何かの良い匂いが混ざり合って漂っていた。

レイルは、何だかお腹がすいてきた。砂漠では殆ど何も口にしていなかったからだ。屋台で店員が燻した肉の塊をスライスしてお客に売っているのを見ると思わず自分も買いたくなったが、ここで馬から降りるのは大変だし、まずは目的地にたどり着いてからにしようと思った。

暫くして商業区を抜けると、人はまばらになった。
目の前に名も知らぬ木の並木が現れる。

ノルマーダ神殿は、その並木を過ぎてすぐ右に曲がったところにあった。
馬はそこで足を止める。

「はい、到着！」

ケーナはそう言うと先に馬を降り、続いてレイルが降りるのを手伝った。
レイルは地に足が揃うとすぐにお辞儀をした。

「ありがとうケーナ。おかげで助かったよ。」

「どういたしまして！」ケーナは腰に手を当てていった。
「じゃあ、せっかくだから祭司様のとこまでついて行ってあげるよ。レイルだけじゃ上手く話せるか心配だからね！」

「うん！」

2人は、丸い特徴的な物体が付いた屋根を持つその建物の扉を開け、中に入る。
中は薄暗く外と比べて格段に涼しかった。

英雄の像（前書き）

神殿に入った2人は中にあった2体の彫像を見る。

英雄の像

中には、迎えるかのように二体の石像があった。
一体は冥術師の始祖である賢者ウガルティウス。
もう一体は、かつて魔神ヴェザイアスを倒した英雄アクロスを助けた聖女メルサイアだ。
2人ともこの世界で知らぬものは笑われると言うくらい有名な人物であった。

これらの彫像は、冥術関連の神殿に行けばどこにでもあるものだか、制作者は皆違うため顔や雰囲気は異なる事が多い。時にはものすごく面白く滑稽な顔をした彫像もあった。

「どう？　ここの、ウガルティウスは良い出来でしょ？」

ケーナは、そういって威厳ある老人の像をポンポン叩く。
ウガルティウスの像を触るのは冥術師にとってはやってはいけないことだったが、レイルは止めなかった。彫像の出来の良さに見とれていたのだ。

「すごいよ。今まで見た中で一番格好いいよ。誰が作ったの？」

「ああ、確かこの国の彫刻家でアルミンドラって人だったかな？もう死んじゃったんだけど、人間国宝になったんだよ。」

「へぇ、すごいなぁ。こんなに精密に人物を作れるなんて。僕には出来そうにないよ。」

「もー、レイルは弱気だね。やってみてもいないのに出来ないなんて決めつけちゃだめだよ。私は、興味引かれたらバンバン挑戦しちゃうんだけどな。……あ！」

ケーナは足音に気付いた。
そして、その足音はすぐに人の姿を現す。

「……フムム、何か用かな？　おお、ケーナじゃないか！」

その皺多き老人は、冥術師特有の銀色の神官服と、帽子をかぶっていた。
眉毛は長く垂れて穏やかそうな表情を見せる。顎鬚も長く首の付け根くらいまであった。

冥司祭エドガルド（前書き）

レイルは、神殿の主である冥司祭に自己紹介をし、試練を受ける事を言う。

冥司祭エドガルド

「冥司祭様、久しぶりっ！　まだ、ピンピンしてて何よりだよ！」

ケーナは親しげに老人に話しかける。

冥司祭は、冥術師の中でも最上位の存在で、神殿の主を務める事が多かった。レイルは、老人が冥司祭としると慌てて深く頭を下げた。ケーナがこれほどの偉い人に軽々しく話しかけるのが信じられなかった。

「ほう……この子はケーナの友達かね？　えらく砂塗れだが……」

「そう！　この子はレイルって言う名前で、さっき砂漠の中で友達になったんだよ！　冥術師の試練を受けに来たんだってさ。」

「ふむ。」老人は、レイルに近寄る。

「君は、一人で砂漠を越えて来たのかね？」

「は、はい。冥司祭の方にそれも試練だと言われて、ウォーターボトルだけ貰って……その……」

老人は眉を顰める。

「魔法水筒だけじゃと？　普通の冥術師の修行ではそこまでの事はせんのじゃがな。大体何人か連れで来るものじゃ。して、レイルよ。おぬしの師はどういう名じゃ？」

「ええと、アファルガ冥司祭様です。」

「ほう、聞いた事はある。大国ファブリドの司祭じゃな……全く無理をさせるものじゃ。それで、メダロスはちゃんと持っておるのか？」

メダロスは正方形の銀版で冥術師の免許の様なものである。右上には穴が開いており、各所の神殿で修業を積み試練を乗り越えた時、クレロスと言う銅板を貰いこの穴に輪を通して繋げられるようになっていた。このクレロスが１０枚に達すると一人前の冥術師として認められるのだった。レイルは袋から、このメダロスを取りだして司祭に手渡した。

「ふむ、確かに。クレロスがまだついていない言う事は、試練はここが初めてのようじゃな。」

「はい、まだ他の試練は受けた事がありません。ここが、はじめてです。」

司祭は髭をさすった。
そして、ふぉふぉふぉと笑った。

「ここの試練を真っ先に受けようとは大したものじゃよ。言い遅れたが、ワシの名はエドガルドじゃ。レイルよここの試練に挑もうと言うなら止めはせん。しかし、相当に甘くは無いぞい？」

「はい！」と、レイルはたじろぐ事なく答えた。

ケーナの斡旋（前書き）

ケーナは、試練の間のレイルを住まわせてくれる処を探す役目を負う。

「よしよし、では明日試練についての説明をしよう。今日はゆっくり休め。……と、言ってはみたのじゃが、お主は寝床のあてはあるか？　生憎じゃが、この神殿は部屋が少なくてお主を住まわせる所が無いんじゃ。」

つっぽりと旅に出されたレイルに、試練の間住ませてもらえるようなあて等無かった。

しかし、彼には助け船がすぐ傍にいた。ケーナだ。

「そのことなら任せてよ！　私が何とかしたげる。多分、あそこなら大丈夫だと思うから。」

「ほう、流石はケーナじゃな。よし、この少年の事お前に任せた。」

ケーナは、任せたと言ってえっへん胸を張った。そしてすぐにレイルを引っ張って、神殿の外に出ていき、再び馬にまたがると商業地の方へ再び走った。目的は、食事である。

わかっていたとでも言うように、レイルが食べたいと思っていた屋台に向かい、スライスした肉片をケーナは買ってあげた。お金もケーナが払った。他にも色々な食べ物と、フルーツジュースを買って、建物の下にあった腰かけに座る。

「ありがとう。　これ、食べたかったんだ！」

「おおっ、よっぽどお腹空いてたんだね。良い返事だ！　その料理はドーネルスローフって言うんだ。この辺の名物だよ。」

空腹耐えきれず、レイルは肉を一切れつまむと口に入れる。
賑やかな肉汁と様々なスパイスから醸し出される旨みが新鮮かつ美味であった。
おもわず、顔がほころんでしまった。

「レイルったら、よっぽど美味しいんだねぇ。見ているだけでわかるよ。」

「むぐむぐ。」

「あんま焦って蒸し返さないようにね。　それで、レイルを泊めてくれる人の事なんだけど。」

「むぐ？」

「とってもいい人だから安心していいよ。」

「むぐぐ！」

「あ、やっぱり喉に詰まらせた！」

ケーナに背中をさすられて、もう少しで咳き込みそうだったところをレイルは何とか免れた。

砂漠の民の心意気（前書き）

ケーナが親切にしてくれる理由を、レイルは尋ねる。

砂漠の民の心意気

「けほっ、ありがとうケーナ。色々とお世話になっちゃって……」

「いいんだよ、気にしないで。」

「ケーナ、どうしてこんなに親切にしてくれるの？」

ケーナはフルーツジュースをひとすすりするとふーっ吐息を出した。

「この国の心意気ってやつかな？　デルアラスの民は、外から来た客人はみんなこの国にいる間幸せな思いをしてほしい。そして帰る時もこの国は良かったって思ってもらいたいって言う気持ちがあるんだ。だからレイルにも、この国に来てよかったと思ってほしいの。良い思い出を残してほしいのよ。」

「そうなんだ。確かに、この国って良い雰囲気だよね。賑やかで楽しげで……こう言うところ、僕は好きだよ。」

「それはよかった！　そう言ってくれると私も甲斐があるっても

んだ。さあ、この人形焼きも食べちゃって！」

気を良くしたケーナは、自分の分の食べ物をどんどんレイルに与えたが、砂漠で何も食べていなかったレイルの腹はそれを全て吸収した。食べ物をたらふく食べた2人は一呼吸すると、再び馬にまたがり商業地を後にし、居住地を北西に向った。

辿り着いたのは、二階建ての一軒家だった。

白壁と全体的に四角い作りはこの国特有のものだったが点く明かりの燈す色はレイルに懐かしさを与えた。中からは香辛料のようなハーブのような匂いがした。ケーナはこの家の玄関に立つと、大きな声で聴きなれない言葉を放った。すると、中から一人の女性が扉を開けて出て来た。褐色で黒髪の美人であった。

「あら、ケーナ。こんな時間に何の用？」

「ファリーダ。悪いんだけどちょっと話聞いてくれる？　この子が、ちょっと訳ありで塩居候させてくれるところを探してるんだけど。」

ファリーダと呼ばれる女性は、そうなのと答えるとケーナとレイルを家の中へと案内した。

コーヒーの味（前書き）

ファリーダはレイルの居候を承諾した。
そして、洩れる過去の悲しい出来事。

コーヒーの味

「へぇ、冥術師の試練に挑むんだ。君、すごいねぇ。」

ファリーダは、コーヒーを白いカップに入れて、椅子に座ったレイルとケーナの前に置いた。

この国の独自製法で作られた「デルマリン」と言う名前のコーヒーだとケーナがレイルに教えた。

レイルが一口それを啜ると、独特の酸味が口の中に染みわたった。

食後には、最高の味だった。

「いいよ、面倒見てあげる。部屋もあいてるし、一人くらいなら十分大丈夫だよ。」

「ありがと、ファリーダ。恩に着るよ。」

「気にしないで、この子がいた方がこっちとしても気が和みそうだからさ。妹のアーニャが死んでからずっと寂しい思いをしてたからね。」

レイルは、えっ？　と声を出した。

「ああ、レイルは知らないよね。ファリーダは妹と2人で暮らしてたんだけど、去年その妹さんが死んじゃってね……良い子だったよ。私とはとっても仲良しだったんだ。」

「そうなんだ……」レイルは、カップを持ちながら少し俯く。

「こらこら、気にしなくてもいいって。ファリーダももう立ち直ってるしさ。それより、居候させて貰えるんだから素直に喜びなよ。」

「うん。　ファリーダさん、ありがとうございます！　レイルと言います、よろしくお願いします。」

レイルはが丁寧に頭を下げると、ファリーダはまかせておいてとばかりににっこりと笑った。

友達（前書き）

ちょっと強引にケーナとレイルは晴れて友達になった。

「じゃあ、ケーナ。この子は私が預かるから、今日はもう帰っても良いよ。」

ファリーダはそう言ったが、ケーナはすぐに帰る様子はなくまだコーヒーを啜っていた。
まだ、帰る様子は無かった。

「ちょっと待ってよ。まだ来てからそんなに時間経ってないんだし、もうちょっとお話しようよ。」

「だーめ。あんたも一応門限あるんでしょ？　明日以降にしなさいな。」

「ちぇっ。ファリーダって変なとこマジメだよね。わかったよ、帰るって。」

ケーナはしぶしぶ席を立つ。
そしてレイルを見るとにかっと笑った。

「んじゃ、明日また来るねレイル！　一人でまたあの神殿行けるか心配だからさ。」

「えっ？」

「嫌なの？」

「そう言うわけじゃないけど……なんだか悪いなって思って。」

ケーナは、弱気な台詞を吐くレイルの方をポンと叩いた。
そして、顔を近づけて言う。

「いいの。レイルと私は、もう友達だからさ！　今までの親切のお礼は私と友達になること。それで十分だよ。いいよね？」

レイルがいいよと頷くと、ケーナはじゃあといって颯爽と立ち去って行った。
家の中はちょっと寂しくなった。

ファリーダの腕まくり（前書き）

レイルは、ファリーダにも茶化される。

「あの子、珍しく粘ろうとしたね。いつもならサクッと帰るんだけど。」

ファリーダは椅子にどぉんと座った。

胸の部分が波打つ。ナイスバストなのが克明であったが、くそ真面目なレイルはそれには興味を示さなかった。

「よっぽど、あんたが気に入ったのかもね。男に興味なっしんぐのケーナに気に入られるなんて中々大したもんじゃないか、レイル。」

「は、はぁ……」

レイルは、顔が真っ赤になった。

褒められると、すぐに照れるタイプだった。

そんな彼を、ファリーダは頬杖を付いて見る。そして、あまりの純朴さに笑みがこぼれた。

「ハハッ！　もっと自分に自信持ちなって。途中までは一人で砂漠越えて来たんだろ？　並の人間が出来る事じゃないんだからさ。それに、結構美少年じゃないの……下手すりゃ女の子にすら見える

くらいだよ。」

「は、はぁ……」

「こりゃ、楽しくなりそうだな～作る料理は倍になるけど、逆に練習にもなりそうだし。レイル、明日からご飯は任せといてよ腕をふるって最高のご飯を作ってあげるからさ。」

そういって、腕まくりをするファリーダにレイルは安心感を得た。ケーナ同様、信用できそうな人だと思った。

ただ、まだ彼女とケーナの2人の事を深く聞く事はやめておいた。おいおい、ゆっくりと聞いて行くことにした。

友の記憶（前書き）

久々にベッドで眠れると、レイルは喜ぶ。

友の記憶

レイルが案内された部屋は、よく片付いたこぎれいな部屋で。南側に大きな窓があった。
とても居心地のよさそうな部屋だった。

ファリーダが、また明日と階段を下りていくと、レイルは真っ先にベッドに身をうずめた。こんなふかふかのベッドで寝るのは久しぶりだったので心躍った。

この家に居候できるなんて本当にラッキーだ。
食べ物も作ってくれるみたいだし、小ぶりだがお風呂もあって、さっき砂漠でたまった砂埃と汗を一気に流す事が出来た。ケーナには本当に感謝しなくては。

レイルはあおむけになると、ふぅっと息をする。
長旅で本当に疲れていたため、あっという間に眠気がやってくる。
今日はもう寝てしまおうと彼は思った。明日から試練は始まりを迎えるからだ。

ゆっくりと目を閉じ、故郷の事を思い出す。
良い思い出はそうはない、故郷の風景を。

友人の顔が、ふと脳裏によぎった。カインと言う金髪の少年だった。

良く笑う元気な子で、色々とおせっかいだったが人柄のよい人間だった。

レイルは一緒に色んなイタズラをしでかしたものだった。もっとも、ただレイルはほとんどカインに引っ張られていただけだったし、イタズラされる側になることも多かったのだが、今となっては、良い思い出だった。

しかし、そのカインとはもう何年も会っていなかった。レイルのように厳しい旅に出て、そのまま行方知らずになっていた。

カインは今どうしているのだろう？

生きているのだろうか？

そう考えているうちに、レイルは夢の世界に誘われた。

城がわが家（前書き）

朝の新聞に、デルアラス城に侵入者が出たとの記述。
それに関連してケーナの素性が少し明らかになる。

翌朝、レイルが朝食を取っている時にケーナは早々とやってきた。そして、机に座るとファリーダにコーヒーを催促した。

しかし、ファリーダはすぐにコーヒーを入れようとはせず、代わりに地方新聞をケーナの前に差し出した。ケーナがのぞきこむと、そこにはこう書いてあった。

＜国の中心にあるデルアラス城に昨日、何者かが侵入した！　門番４人が襲われ、気絶させられたが命に別条はなし。犯人の行方は今のところ不明、物色された物が無いか、まだ城内に犯人が残っていないか等現在城内総出で調査中である＞

ファリーダは、その新聞に手をついてケーナに目を向けた。向けた方も、向けられた方も真剣な顔だった。

「大丈夫なのかしらね？　犯人がまだわかっていないなんて、ケーナも不安でしょ。」

「まあね、こう言うのは困るよ。行動も制限されかねないし、命の危険だってあるからさ。何せ、屈強な兵士４人を手玉に取ったんだ……スパイか野盗か知らないけどただ者じゃない。ただ、私が見つけた時は何とかしてみせるつもり。」

「へぇ、自信家だねぇ。確かにあんたは昔からじゃじゃ馬で剣の腕は長けてる。でも、相手は何をしてくるか分からないからね……

ところで、レイルは話についていけてないみたいだけど。」

レイルは、試練が始まる事に胸が高鳴っていたため、この事件については反応薄だった。

ただ、ケーナの素性は気になっていたし、城に住んでいるという事実には興味も抱いたいたので聞いてみる事にした。」

「ケーナって、城に住んでるの？」

ケーナはまあねと、さっぱりした口調で答えた。

ただ、それ以上は語らなかった。代わりにファリーダが話し始める。

「驚いた？　この子、結構いいとこの出なんだ。所謂、おひめさまってやつよ。あんまり他の奴には知られちゃなんないんだけど、レイルになら大丈夫だよね？　口外しそうにないから。」

レイルは、とりあえずうんうんと頷いた。

ケーナもなぞるようにうぬんと頷いて、にかっと笑った。

「そうだね、レイルなら大丈夫か……そうなんだ、一応この私は由緒ある家の出なのよ。こうやって外を出歩くのはあんまり良くないんだけど、城の中って退屈だし世間知らずになっちゃうし運動不足になるから、いつも抜け出してるの。一応決められた門限には戻ってるから、今のところ怒られる事は無いよ。」

「そうなんだ。ケーナってお偉いさんなんだね。」

「一応はね。でも、遠慮する事は無いよ！　私達は友達なんだからね。」

ケーナはレイルに向けてウインクをした。
そして、ファリーダが入れたモーニングコーヒーをぐいっと飲む。

試練のはじまり（前書き）

冥司祭エドガルドがレイルに与える最初の試練とは？

試練のはじまり

それから、暫くしてケーナとレイルは神殿に向った。
砂漠の朝は意外と涼しいが、太陽の熱は容赦なく馬に乗った2人に降り注いだ。
立ち並ぶ建物は白く輝いて眩しいけれど美しくもあった。

神殿に着くと、その外の様子とは裏腹に朝っぱらから中部は薄暗かった。
英雄の2体の像は、今日も凛々しく立って何も語らない。

「おお、遅かったな！　もうちいと早う来いな。砂漠の民は１０分前行動が肝じゃからな。」

「すいません……」

朝から元気な冥司祭エドガルドは、本気でレイルを叱ったわけでは無かったが彼は真に受けた。
ケーナはそれを見て、まあまあと場をなだめる。

「今日は、私がもたもたしちゃったから遅くなっちゃったんです

よ。悪いのはレイルじゃありません。」

「ふむふむ、そうか……ケーナも時間には気をつけるんじゃぞ。ワシなんぞはそう怒らんが、ファアール王とかドルマン兵士長はそういうのにとんと厳しいからな。早めの行動が肝じゃ。」

「はい、冥司祭様々。肝に銘じておきます。」

「わかったらよい。……では、レイルよ、早速だが最初の試練をお前に伝えよう。心して聞けよ？」

レイルは、緊張した面持ちではいと答えた。
それを見て、エドガルドは口に皺を寄せつつ広げる。笑っているようにも見えた。

「よし、では言おう。最初だからまあ、比較的簡単なものじゃ。……このデルアラスから西に進むとファブラリタイと呼ばれる遺跡がある。そこには長い長い地下道があるんじゃが、その最深部には巨大な白蛇が住んでおって、年に数度真珠の様な美しい球を生む。レイルよ、ひとつで良いからその球を取ってくるのじゃ！」

ケーナとレイルはそれを聞いて驚いた顔を見せた。
２人にとってそれは簡単なものには思えなかったのだ。

握手（前書き）

難関を思わせる試練にケーナはエドガルドに詰め寄る。
エドガルドはレイルに間接的にヒントを与える。

握手

ケーナはエドガルドに詰め寄る。

「ちょっと！　あの白蛇のところにレイルを一人で行かせるんですか？」

「左様じゃ。」老司祭エドガルドはゆっくりと頷く。「皆、この試練は必ず行っておる。レイルにやってもらうのは当然の事じゃ。」

「しかし、あの白蛇は人を食べるって聞いた事があるんですけど。かつて何人かはごくりと丸飲みにされたらしいじゃないですか？」

レイルはギョッとした。

どうやら想像どうりに危険な内容のようだ。しかし、断る事はできなかった。

だから、心配するケーナの手に触れて止めに入る。

「ケーナ、いいんだ。これは試練なんだから。」

「だけど……」

「大丈夫だよ、何とかやってみるから。」

「うん、わかったよ。レイルがそうするなら止めはしない……でも。」

ケーナは再び、エドガルドの方に振りかえる。

「司祭様！　私も、レイルに同行していいですか？　今の話だと、一人で行かなければならないとはいっていませんでしたから。」

老司祭エドガルドは、気付いたかと言うように髭をさするとにんまりと笑った。

「ムフ、それは構わん。この試練には、人の手を借りてはいけないと言う条件は無いからのぉ。どれだけの人間の力を借りられるかと言う社交性を試す意味もこの試練にはあるんじゃからな。」

「そうなんだ。」ケーナはレイルの方を嬉しそうに振り向く。

「よかったね！　私がいれば、この試練は難なくこなせるはずだよ。剣の腕だってばっちりだから。」

「すごい自信だね。」

「ホントだもん。もしもの時は任せなさい！」

レイルはケーナを頼もしく思った。
エドガルドの前で、若き2人は改めて握手をする。
ケーナの手は柔らかくて暖かだった。

白蛇の伝説（前書き）

ケーナとレイルは白蛇に纏わる情報を集め始めた。

白蛇の伝説

神殿を出ると、ケーナはレイルをある場所に連れて行った。
考古学者のノエリーという女性の家だった。

金髪ポニーテールで銀縁メガネをかけたその顔に、絹織の白いローブが良く似合う。
ファリーダも美人だったがノエリーもまた聡明な美しさがあった。

「なるほど、あの白蛇の生み出す珠＜蛇真珠＞を取ってくるんだ。そりゃあ大変だねぇ。しかも、殺しちゃだめってか。この子一人じゃ出来そうにないわ。」

「そうでしょ？　だから、この辺の事に関して詳しいノエリーなら良い事教えてくれると思ったんだよ。」

「まあ、それは賢明だと思うよ。あの蛇の事も研究してるしねぇ……ま、３００年くらい生きてるんだから正確には蛇じゃないんだけどさ。」

「せっかくだから詳しく教えてよ、ノエリー」

「いいよ。」

そう言うと、ノエリーは腕組みをしてケーナ達に背を向けた。
そしてこの地域に伝わる伝説を語り出す。

かつて、このデルアラスに大いなる災いが起こった。
水源である、オアシスの水がほとんど枯れてしまったのだ。
人々は飢えと砂漠の暑さに耐えられず、次々と死んでいった。
このままでは、砂漠の民は全滅してしまう。

当時の冥司祭オルドレアは、王の命を受けファブラリタイ神殿で降雨の儀式を行った。
その時に現れたのが今いる白蛇だと言う。

蛇は、オルドレアを丸飲みにした。
しかし、その後に見返りとして砂漠の地下に水を溢れさせ国は救われた。

現在のデルアラスの繁栄も、この白蛇によってもたらされていると言う。
凶暴で人を食うこの蛇を殺さないのはそのためである。

神の使いである白蛇を殺せば、水はたちどころに失せ、デルアラスは滅亡するだろう。
もっとも、この大蛇を倒せるものは無きに等しいが。

白蛇の弱点（前書き）

ケーナはノエリーに白蛇の対処法を聞くが……

白蛇の弱点

「……そんな感じで、あの白蛇はずっとあの神殿に巣食ってるわけ。冥術師の試練の内容に入ってるのは、オルドレア冥司祭が関わってるからだろうね。あの白蛇が＜蛇真珠＞を生み出すようになったのはオルドレアを飲み込んでからの事だから。あの美しい珠にはその冥司祭様の冥の力が込められているって話だし、持っていると何らかのご利益があるのかもねぇ。」

「ふーん、私も少しは聞いた事があるけど。改めて聞くととんでもない白蛇なんだね。」

「そうだよ、あれは神話の生き物レベルだもん。大黒龍ヴァシバンや巨人ガンビオスに匹敵するよ。ちなみに、あの白蛇の名は正確にはレインザードと言います。」

自分の知識を語る時のノエリーはとても嬉しそうだった。調べる事も楽しいが、他人に話す事もまた彼女にとっては楽しみの一つなのだ。他人と接する機会はそう多くないので、こうやって2人もお客が来たのは久しぶりでノエリーにとっては吉日だった。だから、ケーナの質問にも快く答える。

「それで、そのレインザードが襲ってこない方法ってあるの？普通に近づくと襲ってくるんでしょ？」

「らしいね。ただ、今まで冥術師達はその試練を乗り越えてきてるわけだから、あるんだよね方法が。」

「ノエリーは知らないの？」

「実は、知ってまーす！」

「何だ、知ってるんだったら教えてよ。」

「簡単だよ、人間が一人食べられた後はレインザードは暫く襲ってこない。ああみえて小食らしくてねー数分間おとなしくなるよ。」

「えっ……ちょ、ちょっと！　ノエリー、冗談はやめてくれない？」

「冗談でもないよ。試練を受ける冥術師達は、盗賊なんかをそそのかして神殿に連れて行きレインザードの生贄にして珠を取ってくるって言ってたもん。」

レイルの顔がサーっと青ざめたのがケーナには見えた。

続白蛇の弱点（前書き）

ノエリーは、白蛇の攻略法を知っているのだが勿体ぶる。

続白蛇の弱点

「あらあら、そこの少年はビビッちゃってるじゃん！」

「当たり前でしょ？　他人を生贄なんて私達にはできないよ。」

ノエリーは、面白がって笑った。
他人が驚いたり、怖がったりする姿を見るのも彼女は好きだった。
だから、ワザと怖がらせるような事も良く言う。ホラー話もお得意だった。

「まあ、そうでしょうねぇ。言っとくけど、今の話はあくまでもウワサだから。他の冥術師だって他人を犠牲にするのは嫌に決まってるし～」

「ってことは、他にも方法があるってこと？」

「うん、私も知ってるよ。」

「ちょ……それなら、最初から言ってくれればいいじゃん！　何でわざわざ、遠まわしにするのよ！？」

ケーナが怒るのも、ノエリーにしてみれば面白かった。喜怒哀楽が素直な人間の表情と言うものは魅力的だったのだ。だから、ノエリーはケーナの事が好きだった。

「いや～ちょっとからかってみたかったのよ！　どう？　なかなかドキッとしたでしょ。」

「もー、ノエリーの意地悪。ほら、さっさと白蛇の弱点を教えてよ！」

「はいはい、わかりましたー。よーく、耳かっぽじって聞きなさいよ。」

ノエリーはこほんと息をする。
レイルと、ケーナはまじまじと彼女を見つめた。

「さっき、白蛇レインザードは人を食べるとおとなしくなるって言ったよね？　覚えているかい、レイル少年。」

「は、はい。今聞いたばかりなので。」

「よろしい。そう、レインザードはさっきも言ったように人喰い蛇なの。だけど、あの蛇は人を食べなくても生きられるんだ。昔、神殿が固く封じられて人が入る事が出来なくてもレインザードはずっと生き延びてた。じゃあ、何で人を食べると思う？」

「え、ええと……わかりません。」

「おいしいからよ。人の持つ生命の力がとっても好物なの。つまり……わかるかしら？」

「え、ええと……どういうことですか？」

「人の生命の力さえあれば、肉体は無くても良いってことなのよ。」

「え、ええと……それは一体……」

ノエリーはにやりと笑う。

続々・白蛇の弱点（前書き）

人間の生命の力と類似する力を持つものについて考古学者ノエリーは話す。

続々・白蛇の弱点

＞ｉ２９４９０―３６５３＜

「要は、人間を作ればいいってわけ！」

「ええっ！？」ケーナは困惑の表情を浮かべる。

「そんなこと、出来るとは思えないけど。」

「できるわよ。」ノエリーの言い方は自慢げだ。

「偽物の人間ならね。人間の生命力と近似したエネルギーを持つ物体を作ればレインザードはそれを食べて満足するはぅよ。」

「それは一体、似てる物って何よ？」

「あるんだなー、人間そっくりなエネルギーを持つ植物が。＜百年草＞って言うんだけど、砂漠のとあるオアシスに生えてるんだって。」

「へぇ！　それじゃあ、そのオアシスに行けばいいんだね？　よかった、安全な方法があって。」

「どうかなぁ……そう簡単に行くかなぁ？」

「え？」

「そのオアシスって、＜竜巻地帯＞の中にあるんだよね。ケーナも知ってるでしょ？　あそこが危険なとこだって。」

ケーナは頷いた。
＜竜巻地帯＞はこの砂漠では魔の領域で、今まで多くの命が奪われてきた。年中不安定な気候が続き、巨大な竜巻が非常によく巻き起こる。デルアラスの人々の多くが「行くな、行く位ならあきらめろ」と言う場所だった。

「あんなところに……弱ったね。」

「正直、あきらめたらどう？　そこの少年もさっきからずっとオドオドしてるし、ケーナには死んでほしくないしさ。」

「そうはいかないよ！　レイルだって……そうでしょ？」

レイルは、オドオドしながらも頷いた。
それを見ると、ノエリーはふふんと鼻を鳴らした。

「そっか……じゃあ、やってみなよ。その代わり、準備は周到にね！」

「わかってる。」ケーナは胸をポンと叩いた。

「あ、そうだ。あそこに行くんなら、あの人のところに尋ねてみると良いかもね～」

「あの人って？」

「ああ、ちょいと酒臭くて変なおっさんだけど悪い人じゃないよ。名前は……」

砂漠をまたぐ男（前書き）

＜竜巻地帯＞の情報を得るために、ノエリーの紹介した男のもとへ向かう。

砂漠をまたぐ男

その家は、デルアラスの北東の端にあった。
この地域は、職人たちの集う地域で、漂う空気は鉄の匂いがする。歩く者達の多くは、非常に屈強な肉体を持っており、ドシンドシンと音をたてるように堂々と歩く姿は勇敢であった。

木製の扉が開くと、独特のふわついた匂いが漂ってくる。2人はあまり嗅いだ事が無かったので分からなかったが酒の匂いだった。そんな中から顔を出した男はさながらドワーフ族のようで、背はそれほど高くないのだが、筋肉隆々で蚊も刺さないような硬さを感じさせた。

「うむ？　お前らは何者だ？」

「あなたが、ガドスさんですか？」

ケーナの問いに、男は頷く。
この男こそが、砂漠の事についてならこの近辺で右に出るものはいないとすら言われる「砂漠またぎのガドス」であった。

「ガドスさん、教えてほしい事があるんです。＜竜巻地帯＞につ

いて詳しいと聞いたので……」

「なぬ!?　まさかお主ら、あそこに行くつもりでは無かろうな？」

険しい顔でガドスは、レイルを睨みつけた。
レイルは、怯んで目を一瞬そむけたが何とかガドスの方を向きなおして重い口を開く。

「そ、そのまさかです。僕が、冥術師の試練を乗り越えるために行かなくてはならなくて、その地帯の中にあるオアシスに行く必要があるんです！」

「なるほどな。」ガドスは自分の口に生え茂った髭を撫でる。
「まあ、中に入れ。詳しい事を聞かせて貰おう。」

小汚い部屋で（前書き）

ガドスの家の中はとっても酒臭くて散らかっていた。
レイルは、＜竜巻地帯＞の事を聞くが……

小汚い部屋で

ガドスの家の中は散らかっていた。
あちらこちらに新聞紙や怪しげな本がが点在しており、酒の入っているのかいないのか分からない瓶が卓上に並んでいた。食べかけの皿も現れずにそのままになっている。ノエリーが気まずそうに言ったのも無理は無いくらいに、がさつな雰囲気が部屋全体を漂っていた。

ガドスは、ケーナとレイルに部屋の奥にあった謎の食べ物を渡してきた。
干からびた何かの肉らしきものだったが、何だかこの環境で渡されると不安を感じさせる。

「うめぇぞ、食え。」

「は、はい……」

レイルは、恐る恐る肉をひとちぎりすると震える手で口に運ぶ。
死にやしないかと不安になったが、断る事も出来なかった。

がじっ

肉を、歯で挟む。
舌の奥に染みわたるものは、想像を絶するものだった。レイルは思わず顔の筋肉がゆるむ。
ケーナも思わず、おいしい！　と口に出した。

「どうだ、美味いだろう？　ペサート牛のジャーキーは絶品だぜ。」

ケーナもレイルも大きくうなずく。

「酒のつまみには最高なんだよな。肉汁と胡椒の絶妙なコンビネーションがたまらねえのよ。デルアラスでもそう出回っていない貴重なモンさ。」

「ありがとうございます。そんなものをわざわざ僕達にくれるなんて。」

男は、ガハハと笑った。

「おお、礼は良いぞ少年！　俺も金に関しては困ってないからな。お前らみたいに＜竜巻地帯＞に用があるやつも多いから、結構良い金になるんだ。」

「えっ？」

「なーに、金さえ払ってくれりゃあ俺がそのオアシスだって行ってくるさ。あそこもよく、冥術師の輩が頼みに来たし採ってくるものも分かる。例の草だろ？　人と似たエネルギーを持ってるって言う……」

「はい！　それで……いくら払えば採ってきて貰えるんでしょうか？」

男はタバコを一本口にくわえてライターで火を付けた。

そしてふーっと白煙をレイル達に吹きかけたので、少年少女は咳

き込んだ。

「まあ、相場で１５００００ってとこだな。」

高額のやり口（前書き）

ガドスはオアシスに行ってくれるようだが、その依頼金が非常に高額だった。

高額のやり口

「１５００００ミラですか？」

「いや、１５００００ペラールだ。」

「え、えっ！？」

レイルが驚くのも無理は無い。

世界通貨は１０ミラで１ペラールである。デルアラスの一般人の平均月収は５００００ペラールなのを考えれば、この依頼金が相当な高額である事が分かる。対して、レイルの持ち金は５０ペラールくらいしかなかった。

「そんなに、高いんですか？　僕には到底払えません……」

「そうだろうなぁ、少年に払える額じゃねえよ。どうしてもあの草が欲しいんなら、＜竜巻地帯に＞行くしか無いわなぁ。」

「それじゃあ、一体どうやってその場所を……」

レイルがそう言おうたした時、ケーナが前に出て来た。

そして凛々しい目でガドスを見る。

「おっさん、大丈夫だ！　私が払うよ！」

「ケーナ！？」レイルは驚いて目を丸くした。

「任せときな、レイル。これも縁ってもんだからね、何とか工面するよ。」

ガドスもまた、目を丸くした。
そして、にやりと笑う。

「お嬢ちゃん、それは本当だろうな？　無理行ってないよな。」

「本当だよ、何なら明日にでも持って来てやろうか！？」

「ほー、そりゃ楽しみだな！　少年、これはまた良い友達を持ったな。」

レイルは茫然としていた。
そして、そのままケーナに連れられて家を後にした。

砂漠の夕日（前書き）

一仕事終わり、商業地で一服するケーナとレイル。

「本当に大丈夫なの？　あんなこと言って。」

商業地区で、美味しいジュースを飲みながらレイルが心配する
しかし、ケーナは全然平気そうな顔だった。

＞ｉ２９７９０―３６５３＜

「大丈夫だって！　私もそれなりの家の人間だからさ。それくらいなんとこしてみせるよ。」

「でも、やっぱり悪いよ……僕、何にもお礼なんて出来そうにないし……」

「いいんだよ、乗りかかった船だしね。それに、レイル一人じゃこの試練何とか出来そうにないもん。せっかく友達になれたのに死んじゃったりしたら嫌だしさ。」

「だけど。」

「素直に、ご厚意に甘んじなさいな。明日、あのガドスのおっちゃんが驚く顔を2人で見ようよ！」

「ケーナ……わっつ！？」

急にケーナが寄りかかってきたので、レイルは赤くなった。首元に、彼女の綺麗な髪が触れる。脈拍は上昇しバクバク音を立てた。しかし、その音はケーナには聞こえていないのか、体を離す様子は無くニコニコと笑っていた。

「楽しみだね、これから。」

「う、うん……」

レイルは、照れ隠しのように遠くの空を見る。
夕暮れの商業地は暖かい橙色の光で照らされていた。
今日は忙しく歩きまわって過ごした。新しい出会いがった。
そんな一日も、もうすぐ夜を迎えようとしていた。

庶民の料理（前書き）

レイルとファリーダは夕食を取る。

庶民の料理

「へぇ、色々あったんだねぇ。」

熱々の焼き鳥を食卓に置いてファリーダはレイルに話しかけた。腕によりをかけて作ったのか、なかなか豪華な内容の料理だった。

「はい。でも、全部ケーナがやってくれた感じで……何だか申し訳ないです。」

「気にする事は無いよ！　あの子は、そういう性格なんだし。レイルも、自分の巡りあわせがよかったって思っていいと思うよ。運も実力のうちって言うでしょ？」

「そうだけど……」

もどかしい仕草を取るレイルに、ファリーダはさっさと食事をいただこうと促した。

人数分以上ありそうな料理を、２人で食べる。どの料理も味は中々の物で、家庭的な温かみの様なものを感じさせた。

「どう？　私のごはんは。おいしい？」

「はい！　上手だね、ファリーダは。」

「そういってくれると嬉しいなー、作った甲斐があるってもんだ。ケーナの奴も、わざわざウチに食べにくるくらいだからねぇ。

あの子は、自分のトコにもっと美味しいもんがありそうなもんだけど。」

確かに。と、レイルは思った。

あんな大金を一日で工面できるほどのものなら、毎日高級な料理を食べていてもおかしくない。

その割に、商業区のジャンクフードや庶民の料理が好きなのはちょっと不思議だ。

「しっかしケーナも……」

野菜を食べながらファリーダは何かを言おうとしたが、何故か言葉を詰まらせた。

レイルが不思議そうに覗き込むと、彼女は別に大したことじゃないとごまかした。

持ってる女（前書き）

翌日、ケーナは言葉通り……

持ってる女

翌日の朝、ケーナは革製の袋を持ってレイルのもとにやってきた。
レイルが、袋の中を覗かせて貰うと金貨や銀貨がタンマリと入っていた。すごい家の者である事は分かっていても、一日で持ってこられると驚きは隠せなかった。

驚いたのはレイルだけでは無い、要求したガドスもだった。
彼の自宅でそれを見た瞬間に、冗談だろうと言葉が漏れた。

「へへへ、お譲ちゃんただ者じゃねぇな。」

「まあね、ちょっと面倒だったけど。」

「わかったよ、採ってきてやる！　貰うもん貰ったんだ、＜砂漠跨ぎのガドス＞の名において必ず期待に応えてやるよ！」

ガドスはそう言って、革袋を持ったまま自分の胸を叩いた。
ジャラジャラと貨幣の音が響く。

それから、３日経った。

ケーナとレイルはその間、デルアラスを観光がてら見て回っていた。この日は、国立図書館に来た。3階建てのその建物には、古書から新書まで様々な本が眠っている。2人は一緒にその内部を探索して良い本が無いか探していた。

「すごいな、こんなに大きい図書館は見たこと無いよ。」

「そうなんだ。私は、ここよく来るからこんなものなのかなーって感じだけど、やっぱり大きいんだね。そういえば、ここの地下には伝説の書物があるらしいよ。」

「伝説の書物？　もしかして禁経本とか？」

「あるかもね。レイルも禁経使ってみたいの？」

「それは……」

禁経とは、人々の間では究極と言われる冥術の事で、とてつもない効果や威力を持つものを言う。レイルもいくつかは聞いた事があった。しかし、そのリスクについても多く聞かされて来ていた。

禁経は、国を滅ぼす事もあると。

禁経のもたらすもの（前書き）

レイルとケーナは禁じられし冥経（魔術のようなもの）の話をする。

禁経のもたらすもの

「僕、ある国が異次元に飛ばされたって昔聞いたことがあるよ。その国があった場所が有名な＜カリュテの穴＞なんだって。」

「へぇ、あの底なしと言われる大穴か～。一度見て見たいと思ってるんだよね！　私もそう言う話知ってるよ！　実はね、この砂漠も禁呪によるものだって噂があるんだ。」

「そうなの？」

「遥か昔は、このあたりは緑豊かな土地だったんだってさ。だけど……ある大きな戦があって、その時に禁経を使ったら今の様な気候が続くようになって大地の表面は枯れて砂漠化が進んだそうだよ。」

レイルは、興味深そうにうんうん頷いた。

「あの＜竜巻地帯＞も、禁経のものだって説がある。確かにあれだけ竜巻が起こり易いのは不思議だからね。大きな力が働いてるとしか思えない。けど、禁経が生み出したのは悪い事ばかりでもないよね！　デルアラスと言う国とその文化もこの砂漠の賜物とも言え

るし、＜百年草＞も生えるようになったし。レイルとも出会えたし。」

「そうなのかな？　禁経のおかげで今こうしているのかな？」

「否定できないと思うけどな。何にしろ、禁経のもたらす影響は大きいってことよ。じゃあ、そろそろファリーダのトコに戻ろうか。」

「そうだね。ここには、また日を改めて来ようと思う。」

2人は、長い螺旋状の階段を降りて太陽の下に出た。
太陽は、ほぼ天の中心にあった。

変なおじさん（前書き）

ケーナ達は、ファリーダのところに戻る。
すると……

変なおじさん

ファリーダの家に戻り、ケーナが扉を開けると「ガハハ」と言う声が聞こえた。
聞き覚えのある声だ。

「よお、3日ぶりだな！」

「ガドスさん！」レイルは目を丸くする。
「どうしてここに？」

ガドスは、手に持った布袋をシャカシャカと振った。
中に入ってる物は想像できた。

「ちゃーんと、採ってきてやったぜ。これが＜百年草＞だ。」

そう言うと、レイルに向けて投げて来たので慌ててキャッチした。
独特の匂いが袋から漂う。

「早かったですね！」

「あたぼうよ！　慣れたもんだからな～あそこに行くのは。一応

住所も聞いてたから採ってきたついでに持って来てやったんだよ。そこのねーちゃんには随分怪しまれたけどなぁ。」

そう言うと、ガドルはファリーダの方を見た。

彼女はふんと息を荒げた。

「まったく、びっくりしたわよ！　この変なおじさんったら、あんまりにも強く戸を叩くんだもん。変な人じゃないか不安になったんだから。」

「ハハハ、すまねぇ！　つい、強く叩いちまうんだよ。近所のボル爺さんが耳が遠いからいつもドンドン叩きまくってるんでね。」

「はあ……」

「そんで、レイルにケーナよぉ。その百年草は、レインザードに使うんだよなあ？」

ケーナは頷く。

「そうだよ。あれ、この前言ったっけ？」

「今までにもいたからさ。冥術師の依頼人がな。だから、言っておくが、そのまま草をばら撒いてもレインザードは引き付けられん

ぞ。」

「じゃあ、どうするのよ？」

「それはだな……加工してもらうんだ。さっき言ったボル爺さんにな！」

変なじいさん（前書き）

レイルは、ガドスの情報でボル爺さんの元へ行く事に。

変なじいさん

レイル達がガドスと一緒に向かったのは、この界隈では珍しいおんぼろの木で出来た建物だった。入口の扉付近には蜘蛛の巣が張っており、変な顔の書いてある瓶が横向きに転がっていた。

ガドスはドンドンと物凄い勢いで戸を叩く。
ファリーダの言うように、これでは扉が壊れてしまうとレイルは思ったが、まさか本当に扉が壊れるとは思っていなかった。

バギャア！

腐りかけた木製の扉には、男の拳一個分の穴が開いた。
そしてその穴から、目ん玉がこちらを覗き込んでいた。そして、バタンと扉が開く。

「きっさまー、遂にやりおったわ！　この、ドアホウが！　ドアなだけに、ドアホウじゃ！」

中から出て来たのは、みずぼらしいぼろ服を着た頭の眩しい老人だった。
間違いなく、ボル老人である。

「すまねえなーボル爺よ。まさか穴があくとは、このドア弁償してやろうか？」

「はぁ？　ベンゾーって誰ぞな？」

「弁償！　ドアをつけかえてやろうかってことだよ！」

「フム、モマを追っかけて来るのかいな。アレは美味しいからのお。」

ガドスは、うなだれてため息をついた。
ボル老人は想像以上に耳が遠かった。

「まあ、何か用なら中には入れや。」

ボル老人は、3人を部屋に案内する。
そこは、ガドスの家よりもはるかに汚くて、臭かった。

また有料（前書き）

ボル爺は、百年草を加工してくれるようだが……

また有料

「して、要は何じゃの？」

酒をぐびぐび飲みながら、ボル爺さんは聞く。
ガドスは大きな声で応えた。

「＜ダミードール＞を作ってほしいんだ。いつものようにな。」

「ほう、またあれか。じゃあ、そこの少年らは冥術師ってことかいな？　まったく、金のかかる奴らじゃのぉ。人一人生贄に捧げりゃタダじゃろが。」

「そんなことできないよ！」と、ケーナは大声で言った。
「その、＜ダミードール＞ってのは本当にレインザードに効くわけ？」

ボル爺さんは、コップをトンと置いて胸をポンと叩いた。
「当然じゃ！　今までに一度としてしくじった話を聞いた事が無いわい。」

「……何か、うさんくさいなぁ……」

「小娘よ、小声で言っても聞こえとるぞ。それにしても、お主、見るからに色気も胸も無いのお。女としての魅力が無いわい。」

「ちょっ、何ですって！？　人が気にしてる事をサラッと言うなんてー」

ケーナの顔が赤くなった。ムキーと声を出して爺さんに詰め寄りそうだったが、レイルが止めた。そしてか細い声でレイルは、ボル老人に話かける。

「……あの、それで、やっぱり、お金がかかるんでしょうか？」

「勿論じゃ。」小さいレイルの声は意外にもボル老人の耳に入った。

ボル爺さんの耳は金と女と酒の事なら聴力が百倍になる都合のいい耳なのだ。

「ええと、それはどれくらいの……」

「うむ、しめて５００００ペサートじゃ。」

レイルの顔は、さーっと青くなった。

一か八か（前書き）

レイル達は、臭くて汚いボル爺の家を出た。

一か八か

「まったく……あの爺さんとんだ食わせモンだわ！」

ケーナはあの臭い家を出てからも、まだプンプン怒っていた。

結局、今回もケーナが払う事を申し出たが、ボル爺の事は不満なようだ。

レイルは、何だか色々と申し訳ない気分になったので、彼女に謝る事にした。

「ケーナ、ごめん……」

「レイルが気にする事無いんだよ。悪いのはあのスケベ爺さんなんだから。」

「でも……」

レイルがあまりにも元気無さそうだったので、ケーナは怒りを納めてにっこり笑った。そして、今日も商業地に行こうと言い出し、2人は馬を走らせた。

今日の商業地は、昨日にも増して賑やかだった。

何やら、道のど真ん中に人の行列が出来ている。2列で並んでいるが先が見えないほどに長かった。

「これは、何の列なのかな？」レイルは興味深そうにケーナに聞いた。

「ああ、これね。」ケーナは腕組みをする。

「これは、１年に一度の＜砂漠くじ＞を買ってるんだよ。」

「何そのサバククジって？　何か当たるの？」

「勿論！　１ペサートで１枚買えるんだけど……一等賞は何と７０００００００ペサートなんだよ！　すごいでしょ？」

「えっ！」レイルの目が輝く。

「それが当たったらケーナにお金返せるね！　買ってみようかな……」

「おー、乗り気だねぇ。じゃあ、列に並んでみようか！　早くしないと売り切れちゃうかも知んないし。」

「うん！」

２人は暑い日差しの中、長い長い列に並んだ。

人の熱も加わって汗がドンドン湧いて出た。

そっと財布にしまっておく（前書き）

レイルは、＜砂漠くじ＞を買ってファリーダの家に戻った。

そっと財布にしまっておく

「へぇ、なけなしのお金で買ったんだ。やるねぇ、レイル。」

ファリーダは、少年の方を揉んだ。

そして、入れて来たコーヒーを机に置いた。勿論向こう側に座っているケーナの分もある。

ケーナはふーっ息を出してからケーナに話しかけた。

「ホント、あの列に並んだのが一番疲れたよ。もう汗だくだく～まあ、ボル爺のくさーい部屋にいるのも楽じゃなかったけどね。ガドスのおっちゃんもアレだけど、ホントあの爺さんはファリーダに遇わせたくないな～」

「それ、さっきも言ってたわよ。よっぽどそのボル爺さんってのは困った人なのね。」

「うん、金と女の事になると急に耳が聞こえるようになる都合のいいお方でしたから。おまけに人の事を色気ないとかぺちゃんこだとか言ってくるし。」

「聞くからにエロいお爺さんだね！　でも、ぺちゃんこなのは当たってるんじゃない？」

「ファリーダっ！」

冗談よと言いながら、褐色肌の彼女は褐色のコーヒーをケーナの

胸下に置いた。
ケーナは、不機嫌そうにぐんぐんとコーヒーを飲んでプハーと大きく息を吐いた。

「それにしても、レイルったら私が払うって言ってるのに断るなんて真面目だなぁ。」

「だって……」レイルはもじもじする。
「これ以上人のお金借りるなんて悪いよ。返せる当ても無いんだから。」

「くじの1枚や2枚どうってことないのに。」

「ケーナは気にしてないかもしれないけど、それに甘えちゃいけないと思うんだ。出来る限りは僕が自分で何とかしなくちゃいけない。もし、この＜砂漠くじ＞が当たったら、今まで払ってもらった分全部返すからね。」

「ふーん」ケーナはレイルの考えに感心した。
「ただ、分かってると思うけど、それが当たる確率はすっごい低いよ。なにせ何百万枚と出回っているんだからさ。くじはお楽しみと思っておいた方が良いと思うよ。」

レイルは頷いた。そして、財布の中に挟まれたくじの数字を確かめる。
3枚買ったこのくじが、意外な結果をもたらす事をこの時は誰も予想していなかった。

いざファブラリタイへ（前書き）

ボル爺の人形が完成した。
ついに白蛇の神殿へ向かうレイルとケーナ。

いざファブラリタイへ

2日後、約束通りボル爺は＜ダミードール＞を完成させた。

「これさえあれば、レインザードなど恐るるに足らんぞ。」

「ありがとうございます。ボルお爺さん。」

「何々、金をもらえば約束は守るぞい。」

レイルが渡された自分の手首くらいある人形は、可愛らしいのか気味が悪いのか微妙なところの顔立ちをしていた。手に当たる部分には変な文字が書いてある。

「よし！」ケーナは、レイルの方を叩いた。

「それじゃあ、早速神殿に行こうよ！」

2人は馬に乗りデルアラスの門を出ると、馬で西に駆けた。
走り続けて1時間弱が過ぎたころファブラリタイ神殿がその姿を現す。

「随分と荒れてるね。」

「うん」

馬を下りると2人は神殿の入り口に近づいた。

普段は人の寄りつかないその石造りの建物は、ひびが目立ち、周りの柱は殆どが倒壊していた。しかし、かつて冥術師達が住んでいただけあって、神聖な雰囲気は漂っていた。壁に描かれた獅子の絵は、こちらを強く見据えてくる。

「この中に、レインザードがいるのね！　レイル、慎重に行くわよ。」

「そうだね、中がどうなってるか分からないし。」

神殿の中の暗闇に、2人は足を踏み入れた。

闇を照らす光（前書き）

神殿の内部は闇に包まれていた。

闇を照らす光

ファブラリタイの中は漆黒の闇だ。
燈す光も無く奥は吸い込むような暗黒に包まれている。

ケーナは、持ってきた松明を取り出したが、レイルが火をつけるのを止めた。

「えっ？　こんな真っ暗闇を進もうって言うの。」

「ううん」レイルは首を振った。
「僕の＜デリア＞で何とかするよ。」

「あ、使えるんだ！」ケーナは手をパチンと合わせた。

＜デリア＞は冥術の１つで、当たりを照らす光の球を作りだす。
見習い冥術師でもほとんどが使える初歩的な冥術だ。
レイルは手を前に差し出すと、ふっと目を閉じて念じた。

「辺りを照らす光の球よ、我に付き添え……＜デリア（照光）＞！」

ぼわっ。
神殿の中は一気に光を浴びて明るくなった。

「へー」ケーナが、物珍しそうに発生した光球を見る。
「やるじゃん！　さすがレイルだよ。」

「いや、そんな、褒めるものでもないよ……」
しかし、言葉に反してレイルは嬉しそうな顔をしていた。

光球は術者の側に勝手についてくる、非常に便利なものだ。
２人は両手を楽にしたまま、神殿を奥に進んだ。

暫く直線状の通路を進むと階段があり、それを降りるとまた通路が伸びていた。
通路の両橋には部屋の様なものが続く。冥術師がここで暮らしていたのだろうか？
２人は、それらの部屋を覗きながらゆっくり歩いた。

「ここも違うね……」

「うん。」

どの部屋も、空っぽだった。
家財等はみんな持っていかれてしまったのだろうか？
残っていたのは、何かの骨ばかりだった。

「さすがにこんなところにはいないかな……あっ！」

「どうしたの？」

ケーナは何かに気付いた。
目の前、通路の奥に何かがいる！

砂漠の蜘蛛（前書き）

レイル達は、モンスターと遭遇した！
戦闘開始！

砂漠の蜘蛛

＞ｉ３０５１７―３６５３＜

目の前に現れたのは、大きな砂色の蜘蛛だった。
ケーナは、剣を鞘から抜く。

「サンドスパイダーだ！　こういうところに住み着く奴だ。」

「やっぱり、危険なの？」

「勿論、あいつの吐く糸に絡められたら身動きとれなくなってそのまま餌になっちゃうよ。ひとまず後退するよ。」

２人は、後退し蜘蛛と距離をとる。
蜘蛛は、じりじりとこちらに近づいてきた。そして、ケーナの言ったようにシャアと糸を吐き出してきた。

「うわっ！」

「ケーナ！？」

ケーナの体に糸がまとわりついた！
非常に粘着質で、このままでは剣を振るう事が出来ない。

幸いにもレイルは無事蜘蛛の糸から逃れた。

「しまった……このままじゃ……やられる！」

「大丈夫だよ。僕が、何とかするから！」

「レイル？」

少年は、特殊な構えをとる。冥術を使うためのポーズだった。

この恰好でレイルは念じる。ケーナを守るために。

レイルの実力（前書き）

レイルの冥術がモンスターに炸裂する！

レイルの実力

＞ｉ３０６５８―３６５３＜

「冥の炎よ、眼前を焼き尽くせ！　＜バイダーレイヴ（火炎衝）＞っ！」

目の前に炎の波が現れ、大蜘蛛目掛けて流れて注がれる！
大蜘蛛は炎に包まれて黒焦げになった。

「すごい……」ケーナは、レイルの放った冥術に驚いた。
「灯りを点けるのよりすごい奴だね！　レイルって結構戦えるんじゃない！」

「いや……これくらいは……」

レイルは、照れくさそうに頭をの後ろをさすった。
謙遜する彼だったが、この炎の冥術の威力は褒められるレベルだった。

「さすが、冥術師だ。」ケーナは、蜘蛛の糸をやっと振り払うことができた。
「私の使えない冥術いっぱい使えるんだ。羨ましいなぁ。私は、回復系しか使えないからね～」

「ケーナも使えるんだ！　すごいね、独学で覚えたの？」

「うん……まあね。じゃあ、モタモタしてないで進みましょっか！」

ケーナの言うのに戸惑う感じは気になったが、レイルは突っ込まなかった。

奥へ奥へ（前書き）

神殿の更に奥へ進む2人。

奥へ奥へ

それからも、２人は何匹かのモンスターに遭遇した。

砂ネズミのサンドラット。
大きなコウモリのジャバルダン。
光の幽霊ウォルオブイスプ。
ムカデ魔獣ドルオプケン。

など。
これらを、次々に退けて、神殿の奥深くに進む。
長い道のりにも遂に終わりが近づいてきた。

「あれが、最深部かな？」

レイルが、一本道の通路の先みた先には他よりも大きな入口がある。
どうやら、彼の言った事は本当のようだった。
２人は、ゆっくりその部屋に近ずく。
その部屋は、天井も高く奥行きがあるのが分かった。

「ここの蛇がいるのかな？」

ケーナは剣を手に持っている。
剣先が、冥術の光で怪しげに煌めく。
いよいよ2人は入口の中に足を入れる事となった。音を立てずに、
静かに部屋に侵入する。

「……あっ。」入った瞬間レイルが小声で驚く。
「レインザードだ。」

部屋の奥に、堂々とした大蛇の姿が映し出されていた。

白蛇レインザード（前書き）

レイル達は、遂にレインザードを捉えた。

白蛇レインザード

シュルルルルル

独特の声がする。白き蛇の啼き声だった。
その体の大きさは、かのドラゴンくらいそれ以上の大きさである。

「あれが、レインザード……」

レイルはゴクリと唾を呑む。
さすが、神の使いと呼ばれるだけあって想像以上の威圧感だ。
まだこちらに興味は示していないが、とぐろを巻いたその巨躯には容易に近づきがたい。

「さーて、どうしようかな?」

ケーナは、袋から人形を取り出した。
ボル爺のダミードールだ。

「うまくいくかな?」レイルが心配そうな顔をする。

「あのエロじいさんを信じるしかないわね。何とか距離を縮めて、この人形を置きましょう。」

2人は少しずつ白蛇に近づく。
いつこちらに気がつくか、気が気で無かった。

一歩。
一歩。
一歩。
また一歩。

シャアッ！

レインザードが声を上げる。
レイルはビクついたが、また静かになると歩みを始めた。

一歩。
一歩。
また一歩。

シャァァア！
レインザードがまた声を上げた。今度はどうやら気付いたようだ！
蛇は、顔をレイル達の方に向ける。

あれれ？（前書き）

白蛇に、ダミードールを与えておとなしくさせようとするが……

あれれ？

「気付かれた！？　よーし、えいっ！」

ケーナは、手に持つダミードールを蛇の方に投げつけた。
ボル爺の言う通りの方法だ。こうして、あとはレインザードに食べさせれば大丈夫との事だった。

シャアア！

白蛇は、ダミードールに喰らいつく。
そしてあっという間に自分のお腹に入れてしまった。

「よーし、これでいいはず！」

2人は、白蛇の様子をうかがう。
おとなしくなるのを待つつもりだった。
しかし、事態は予想外の方向に傾く？

「あ、あれ？　何かおかしいな……」

「そうだね、何だか、こっちを見てるんだけど……」

シャァァ

白蛇は、おとなしくなるなる様子はなく、何とこちらに近づいてくるではないか！

「うわわっ！　な、何で!?」レイルの顔が青ざめる。

「ちょっと！　あの爺さん、話が違うじゃないのよぉ!?」

2人は恐る恐る後退する。
このまま飛びかかってでも来たらおしまいだ。

一歩。
一歩。
また一歩。

次の瞬間！
蛇がその動きを早めた！

止まる白蛇（前書き）

白蛇が、レイル達に迫る！　しかし……

止まる白蛇

「わあああああ！」

レイルは迫りくる蛇に対して逃げる事も出来ずに立ちつくした。
思わず、声を上げてしまった。

ケーナは、そんなレイルを庇うように剣を構えて何とか白蛇を迎え討とうとする。
しかし、体は震えていた。

蛇の頭部は、一目散に2人の目の前に向かう。
そして、ケーナの体と肉薄した時、意外な事が起こった。

＞i３１５５０―３６５３＜

「え？」

ケーナが驚くのも無理はない。
白蛇レインザードの動きがピタリと止まったのだ。
そして、今まで威圧的だった雰囲気が薄れ、幾分おとなしい顔つきになった。

ヒュルルルと今までとは違った声を出している。

「これは一体……」レイルは、唖然としていた。

ケーナは、剣を納める。

戦意が無いのがわかったからだ。

「レイル……大丈夫みたいだよ。この子、私達を食べるつもりはないみたい。」

「そ、そうなの？」

「さあ、行きましょ？　あの奥に、目的のものがあるはずだから。」

「大丈夫かなぁ？」

ケーナを先頭に、２人は奥へと歩き出した。

白蛇は牙をむく事はなく、ただ２人についてくるだけだった。

蛇真珠入手！（前書き）

原因不明だが白蛇がおとなしくなった。
いよいよ、目的の珠の入手に取り掛かる2人。

蛇真珠入手！

蛇をうしろにゆっくりと奥に進むと、確かにそこには光り輝く珠が沢山あった。
まぎれもない。「蛇真珠」と呼ばれるものだった。

音をなるべく立てな言うように、レイルはその美しい無数の珠に近づいてそのうちいくつかを小さな革カバンの中に入れた。そして、蛇の方に向き直る。

白蛇はおとなしく、こちらを見つめていた。
ケーナは、まるでこの蛇言葉が解るかのようににっこりとわらった。

「ごめんなさいレインザード。ちょっと、お邪魔しました。」

少女が柔らかい声でそう言うと、白蛇は退路を遮るのをやめて、横に退いた。
２人は、そんな蛇を脇にして、もと来た道へと歩き出す。

最初の試練は成功した。
蛇の部屋から出た２人は、ほっと肩を撫でおろした。

ケーナの謎（前書き）

神殿を後にして、デルアラスへ帰る2人。

ケーナの謎

神殿の埃臭い闇から抜け出した2人は、馬に乗り元来た道を引き返す。
太陽は、まだ沈まず強い光で照らしてきた。しかし、行きの様な不安な気持ちが無い帰り路は楽なものだった。馬が砂を踏みつける音を聞きながら、ケーナはのんびりと手綱をゆらゆらと揺らす。

「いや、大成功だったね！」

「そうだね。」レイルは頷いた。
「でも、ケーナがいなかったら今頃は食べられてたかも。」

「いやいや。」ケーナは右手を振る。
「ボル爺の人形の効果が出るのが遅かっただけだよ、多分。私もびっくりしたけどね。」

「そうかな……本当にそうだったのかな？　だって、ケーナ。レインザードの言いたい事がわかってたみたいに見えたんだけど。」

「え？　ああ、そういえば何となく。でも、心当たりは無いなぁ。あんな白蛇と会ったのは初めてだし。」

「ふぅん……」

レイルは、何だか腑に落ちないところがあったが、それ以上追及する気は無かった。
何にしろ、生きて目的を果たして帰れたのだ。今はそれで十分だった。
だから、次に口にした言葉はお礼の言葉だった。

「ケーナ、本当にありがとう。また、頼っちゃったね。」

「そんなことないよ！　レイルの冥術すごかったじゃない。今日は、ホントに見直したよ。」

褒め返されて、いつもの如くレイルの顔は赤くなった。
馬は、それを冷やかすかのようにブルルンと鼻息を荒くする。

デルアラスの壁が2人に再びその姿を現したのは、太陽が陰りを見せた時だった。

第二の試練（前書き）

第一の試練を終えたのも束の間、エドガルドは次の試練を出す。

第二の試練

「ほお、よくぞ持ち帰った」

美しい真珠の様な球を手に取ると、エドガルドはフムフムと頷いた。

神殿の薄暗さ暗さに引き立てられるように珠は淡く輝く。

「エドガルド様……」

レイルは持ってきたにもかかわらず心配そうにした。

しかし司祭が表情を緩めると、体の力が抜けた。

「よし、これで第一の試練は終了じゃ。よくやったな」

「は、はい！」

「では、次の試練を与えよう」

「……えっ？」

もう次の試練ですかと言いたかったが、レイルは口を閉じた。

「レイルよ、良く聞け。次の試練も大変なものじゃぞ。言葉にすれば簡単じゃがな」

「は、はぁ……」

「レイルよ」エドガルドは、表情を硬くする。

「司祭様……」

「お前、女になって来い。以上」

「えええっ！？」

横にいたケーナ共々に、驚きの声が神殿に響き渡った。

性転換！？（前書き）

第二の試練の内容は、レイルが女になる事だった。

性転換!?

「ちょっと、司祭様！　それって、どういうことなのよ!?」

ケーナの慌てた顔にも、エドガルドは表情を変えない。
淡々とした言葉で応対する。

「言った通りじゃ、ケーナよ。此度の試練、レイルには女の子になってここにやってくることが条件なのじゃ。言っておくが、心が女になったとか言って女装して来ても無駄じゃぞ。心身ともに女性になった状態でなくてはならん。方法は、自分達で探すが良い」

「えーっ!?　そんな無茶な！　レイルが女の子になったら可愛いだろうなーとは思いますけど」

「ケ、ケーナ！」レイルの顔が赤くなる。

女になる冥術なんて聞いた事がない。
それに、女になったとしてその後どうするんだろう?
男に戻れるんだろうか?
少年の迷いをよそに、司祭は話を終わらせようとする。

「では、レイルよ。次は女の子になって戻って来い。それまでは、ここに来なくてもいいぞ」

「……は、はい」

レイルは、鈍い返事をした。そして、そそくさと神殿を後にする。色々と聞きたい事はあったが、やめておいた。

ノエリーは何でも知っている（前書き）

女性になる方法を探すため、2人が訪れたのはノエリーの家だった。

ノエリーは何でも知っている

「ふーん、今度もまた厄介なお題を出されたねぇ。」

ノエリーは、メガネを手でカクカクしながらふふんと鼻息を荒げた。

そして、椅子に座る2人を流し見る。ケーナは、自らアテにして来た割に自信なさげだ。

「ノエリー、どうなの？　なんとかなりそう？」

「うーん、厳しいねぇ。女の子にそんな簡単になれるんなら、世の男どもはたかって女の子になっちゃうだろうし。永遠のロマンだからね～異性になるってのは。私だって、男になってみたいと思ったことあるよ。」

「ノエリーは、男になってもあんまり変わらなそうな気がするけど……」

「なにおー！？　私の乙女心を傷つけるような発言をしましたね、ケーナさん。その発言撤回しないとお姉さん怒りっちゃうぞ～」

「冗談、冗談！　ごめんなさいノエリー。乙女心が残ってたのに気がつかなくって。」

「わかればよろしい！　いや、わかってないでしょ！？　今、さりげなく失礼な発言重ねたよね？」

ケーナは、目を反らした。
ノエリーの目は、そんな彼女からレイルの方に向いた。

「ご、ごめんなさいっ！」

レイルは、とりあえず代わりに謝った。
それを見ると、ノエリーも表情を緩めるしかなかった。

「君、正直ものだね～安心してよ、今の本気じゃ無いし。（ちょっと真に受けた事は言うまい）」

「そーそ。」ケーナも付け加える。
「ノエリーとは、いつもこんなんだから。気にしなくていいんだよ。」

レイルは、ほっと胸を撫で下ろした。
体に悪い冗談だとちょっと思った。

「それで、ノエリー。」ケーナは話を戻す。
「女性になる方法は、あるの？」

ノエリーは頷いた。
「あるよ。このノエリーはなーんでも知ってるんだから！」

女の子に、なる方法（前書き）

ノエリーが言う、女性になる方法とは……？

女の子に、なる方法

「じゃあ、早速教えてくださいよノエリーお姉さま～」

ケーナは猫なで声のような声で言った。

色気のないケーナだが、色気のある声真似はなかなかに上手だ。

ノエリーも、いつもの事なのかハーイと返事をした。

「いいよ！　じゃあ2人ともよーく聞きなさいな。」

2人は同時に頷くと、耳をノエリーに傾ける。女性になる方法と言うのは、この試練を抜きにしても中々興味深い事である。このような事に関心を持たない人間も珍しいだろう。レイルはゴクリと唾を飲み込んだ。

「あのね、レイル君が女になるにはアソコについてるアレをはさみで……えへへ……」

「バカッ！　ノエリーの変態！」ケーナが話をせき止める。

ノエリーが、えへへと笑い声を出す時は大概ロクでもない出鱈目話なのだ。

「ちぇっ、バレたか……しょうがない本当の事を言うよ。」

「最初から言ってよね！　こっちは、本気で聞いてるんだから。」

「わーったわーった。まあそう怒りなさんなよ、綺麗なお顔にしわができちゃうよ？　んで、女の子になる方法だけど……まあ、さっきも言ったけど簡単じゃない。かといって、出来ない事も無い。今までにこの試練を通過した人間は結構いるんだからね。」

「じらさないで、早く行ってよ！」ケーナが急かす。

「もー、せっかく人がのんびり話そうと思ってるのに、しょうがないなぁ。じゃあ、今度こそ言うよ。女性になる方法は……」

レイルは、再び唾を飲み込んだ。

続・女の子になる方法（前書き）

ノエリーは遂に女になる方法を明かす……

続・女の子になる方法

＞ｉ３２５８５―３６５３＜

「それは憑依！　霊をレイルにとりつかせるのよ！」

ノエリーの言葉に、ケーナはエーッと言った。

そして、疑りの目でノエリーを見る。

「今度も、ちゃんと裏があるんじゃないの？　何か代わりになる方法とか」

「ううん」ノエリーは首を振った。

「残念ながら、今回はマジよ。強力な女性の霊をとりつかせれば。肉体も女性に変異するんだよ」

「強力な霊？　なによそれ、普通の霊じゃないの？」

「そうだよ、この世に未練がある悪霊みたいなのじゃないと中々とりつかないし、肉体の変異も無いの。自らの体の再生願望がある霊じゃないとダメ。しかも、霊に取りつかれて魂を奪われる事もあるんだ。そうなると……」

「どうなるんですか？」レイルが心配そうに聞く。顔がもう青かった。

「肉体は乗っ取られて、あの世行き。そうなったら、残念だけど

レイル君は人生諦めるしかないねぇ」

「う……」レイルは寒気がした。

しかし、ここで引き下がるわけにもいかない。今までの努力が無駄になる。

「んにゃ、怖気ずいたのかな？　レイル君。」

「いえ……やってみます。それで、このあたりでそんな霊がいる場所なんてあるんですか？」

「あるよ。」ノエリーはメガネをキラーンと輝かせた。

レイルの勇気に感心した事と興味をそそられた事のあらわれだった。

「そこは……」

「王家の墓さ。デルアラスの古の王家の墓。」

「王家の墓!?」ケーナは、それを聞いて目を大きくした。

王家の墓（前書き）

女になるには、霊をその身に憑依する必要がある。
ノエリーが格好の場所として挙げたのは「王家の墓」だった。

王家の墓

「あの……ノエリー、あそこは国で管理してるから入っちゃいけないんだよ！」

王家の墓は、デルアラスの国家遺産建造物として厳重に管理されていた。もし何もせず放っておいたら、墓荒らしに何をされるか分からないからだ。実際、眠っている王族のミイラや金品を奪われる事件が過去にあった。ただ、その盗んだ人物は原因不明の怪死を遂げたと言う噂だ。しかし、そんなケーナの言葉に、ノエリーは動じる事は無かった。

「ケーナ、合法的に入る方法は十分あるでしょ？　今までの冥術師の人だって、多分国に許可とってるはずだ。それに、あんたはあの三角形のお墓に入る様な家柄でしょ？」

「そうだけど、言うほど簡単じゃないよ。お金の融通よりも大変かもしれない。まあ、レイルのためだし掛け合ってみるけどさ」

「さっすが！　レイル君、頼りになる友達見つけたね！」

レイルは、大きく頷いた。ケーナには本当に助けてもらってばかりだ。

何か自分に出来る事は無いかと思った。そして思いついたのがこの言葉だった。

「ケーナ、その、許可を取るところって僕も行けるの？」

「ん？　そうだね、管理局なら私がいれば大丈夫だと思うけど……」

「じゃあ、僕も一緒に頼みに行くよ。全部任せるなんて悪いし」

「そっか！　確かに一緒にいた方が逆に怪しまれないかもね。じゃあ、明日管理局に行こうよ。」

「うん！」

2人は難しい試練の前であるにも関わらず互いに微笑み合った。

ノエリーはそれを見て、ちょっと羨ましいなと思った。

管理局との交渉（前書き）

王家の墓へ入る許可を得るために2人は管理局へ。

管理局との交渉

デルアラス総合管理局は、デルアラス中心地デアリオンにあった。城とは高い壁一枚を隔てたところにあり、3階建ての赤レンガ造りの建物で大きな入口の扉には守衛が2人いた。

ケーナは、これを簡単に説得する事が出来た。
胸にぶら下げているペンダントを見せただけである。

「どうぞ、お通りください」

番兵の1人はそう言うと、わざわざ扉を開けてくれた。普通の人間ならばここまではしないだろう。レイルは、ケーナの身分の高さを実感させられた。

案内所で2人は行き先を尋ねる。
「王家の墓」を管轄する遺産管理課は3階にあるとのことだったので、若い2人は勢いよく階段を駆け上がった。ケーナは一段飛ばしで登って行ったので、レイルよりも先に目的の階に辿り着いた。

「遅いよ、レイル！」

「ケーナが早すぎるんだよ……つかれたぁ」

「あそこが、＜遺産管理局＞みたいだね！　入口の札に書いてあるよ」

ケーナが指差したところは、随分遠くの部屋だった。
視力良いなぁとレイルは思った。

早速2人はその部屋に向い、部屋の扉をノックする。
「どうぞ」と言う声が聞こえてきた。

「失礼します。」扉を開けて先に入ったのはケーナの方だった。
レイルは恐る恐る後に続く。

恐いおじさん（前書き）

遺産管理局に入室した2人だが……

恐いおじさん

遺産管理局の内部は、とても静かだった。
人はいるのだが、静かだった。

張り詰めたようなピリピリした雰囲気が辺りに漂う。
それらの発生源は真ん中の机に座る、整った髭の厳つい中年男性だろう。
彼が、この課の受付であった。

ケーナはそうでもないが、レイルは恐る恐る席に座る。
体が震える。先日のレインザードと同じくらい怖い目をしていた。

「何だね？　用があるなら早く言わないか！」

受付の男は短気であった。彼が机をドンと叩くと。レイルの体はビクッと痙攣した。どうしてこんな人が受付をやっているのかわからなかった。

「あ、あの……その……」

「声が小さい！　もっと声を出さんか！」

「はぃぃぃ」

委縮するレイルを見かねて、ケーナは口を開く。
「おじさん。私達は、王家の墓に入る許可をいただきに来ました。

」

「おじさんではない！」男はまた机を叩く。

「スカークという名前がある！　そして、小娘！　お前が誰だか知らぬが、王家の墓に簡単に入れさせる事など出来るわけがなかろう！？」

「あの、スカークさん」ケーナは、あまりに高圧的な彼の態度にカチンと来た。

「私は、ケーナ。ケーナ＝ファアールと言います。お聞きになった事無いでしょうか？」

「フン、そんな名前聞いた事ないわっ！」

「本当に？」

「ああ……うん？　まてよ？　まさか！」

ケーナは、スカークが自分の素性に気付いて、驚きを隠せないのを見るとしてやったりと思った。

態度一変（前書き）

ケーナの素性を知った受付のスカークは……

態度一変

「やや、まさかそれほどの方がいらっしゃるとは！　まことにご無礼な態度をとってしまいまして申し訳ありません！」

スカークの態度は一変した。

恐ろしく腰が低くなって、さっきのコワモテの顔の皺は一気に減った。

ケーナはその変化に笑いが起こりそうだが我慢して言う。

「いいのよ。それで、王家の墓に入る許可はすぐに貰えるの？」

「そうですね、あなた方の入るお墓でもありますから」

スカークはヘコヘコと言う。

「この子も、入っていい？　私が信用を置いてる子なの」

レイルも、スカークの表情が緩んだので自己紹介をする事が出来た。

「レイルといいます、よろしくお願いします！」

「はい、わかりました！　早速許可証を発行いたしましょう！」

最早、別人だ。

後ろにいる、係員が書き始めてから１０分で許可証は発行された。

「はい、どうぞ。」

ケーナは、許可証を受け取ると上機嫌で言った。

「ありがとうございます！　早かったですね」

「なになにこのくらい我々には簡単な事ですよぉ……ところで、一つだけ注意しておく事があります。」

「何？」ケーナが聞くと、再びあの恐い顔が戻っていた。

「くれぐれも、地下４階より下には行かないようにしてください。命の保証ができませんから。」

レイルは、グッと息をのんだ。

王家の血（前書き）

王家の墓に入る手続きは容易にとれた。
2人は昼食をとる。

王家の血

商業地は、今日も人で賑わっていた。
毎日新しい商品、食品が増えていき見るに飽きない。

今日のレイルは、ファリーダからもらったお小遣いで「サンドバーガー」を買った。焼いたバトラ牛の旨みあふれる切り肉に玉ねぎ、ファタ葉を重ねてそれらをパンで挟んだ食べ物だ。レイルが一度かぶりつくと、肉と野菜と香辛料の絶妙なハーモニーが口に広がった。

「しっかし、あのおっさんも分かり易い人だったな」

と、隣に座るケーナが言う。手には、袋入りのオニオンリングを持っていた。
まったく、そうだった。上には甘くて下には冷たいのがあの受付の男だった。普通の人間、例えばレイル一人で行ったら、酷い目にあわされそうだ。あんな人間を公職に就かせるのは納得がいかないとケーナは思っていた。そんなケーナにレイルは、残念そうに言う。

「すごいね、ケーナの事知っただけであんな風になるんだもん。僕が行く必要、やっぱり、あんまり無かったかな?」

「そ、そんなことないよ! レイルが言った方が説得力あったの

は事実だし。」

ケーナは、こうやってレイルに褒められているのは良い気分ではなかった。

今までもそうだが、自分の実力で何とかしているとは言い難い。

「王家」の名と財産で何とかなっているのだ。

王家の血。

そう、私は、王家の人間。

ケーナは、表情が固まった。

それを見て、レイルが心配して声をかける。

「ケーナ？　僕、何か悪い事言っちゃった？」

「ううん……レイル、王家の墓ってさ、良く考えたらいつか私も入るんだよね。」

「えっ、そうなの？」

「ちゃんと死ねたらね。ミイラになってあの中で眠る事になるかも知れないよ。」

「そうなんだ」

「入った事無いけど、どんな所なんだろうな？　悪霊も出るって言うから、あんまり良いところじゃなさそうなんだよね。何だか寂しそうな感じだし。そんなとこで、ずっと眠りつづけるなんて嫌だ

なぁ。」

「ケーナ、まだそんな事考えなくていいよ。ケーナが死ぬなんて考えたくないし」

「レイル……私さ……ううん、そうだね、まだ早いよね！　ごめん、何か辛気臭い方向にもっていきそうになっちゃったよ。はい、お詫びの印！」

ケーナは何か言おうとしたのをごまかすように、レイルにオニオンリングを一個手渡した。

ピラミッド（前書き）

レイルとケーナは、王家の墓へ向かう。

ピラミッド

2日後、レイル達は「王家の墓」へと馬を走らせた。
白蛇のいた神殿よりは近い距離にあり、30分ほどで辿り着く事が出来た。デルアラス王家の墓地とも言える場所なので、利便性を意識して建てられたのかもしれない。

2人は昨日、ノエリーに色々と王家の墓と憑依についてのレクチャーを受けていた。ノエリーの熱弁は、聞く者を引き付けるものを持っており、長かったが充実した時間をレイル達は過ごす事が出来た。

「あっ、見えてきた！」

ケーナが指差す先には、砂色の三角形の建造物が見え始めた。
太陽の光を浴びて神秘的な威光を放つその姿に、レイルの心は躍った。

あれが、王家の墓である「ピラミッド」。
デルアラスの歴代の王達の眠るところ。

近くまでやってくると、人の姿があった。
王家の墓を守る監視員だ。レイル達に気が付くと馬に向って近づいてきた。

「お前達は何者だ？　ここに何の用だ？」

ケーナは、かけている革の鞄から、例の許可証を取り出して、男に見せた。

男は、うんうんと頷く。

「よし、では向こうに馬を預けて来い。それから案内してやる」

張られたテントの裏側に砂漠馬を停めると、２人は監視員の男に連れられてピラミッドに向け歩きだした。近づくにつれ、その三角形の建物の大きさが実感に変わってくる。こんなものを昔の人はよく作ったものだとレイルは思った。

どれくらいの時がかかったのか。

どのくらいの月日が流れたのか。

ピラミッドは今日も堂々たる姿で砂漠に座っているのだった。

大ピラミッドの眺望（前書き）

ピラミッドの入り口まで案内される２人。

大ピラミッドの眺望

ピラミッドの入り口は、大きな石造りの階段の上にあった。
監視員に従い、２人は階段を上って行く。
一段あたりが大きく、それが１００段くらいあるので上るのは結構大変だった。

途中、舞い上がった砂が生暖かい風に乗って吹き付けた。
登り終えると、テントの群を見られるくらいに高いところまで来ていた。

「うわあ、良い眺め！」

ケーナは無邪気な子供っぽく喜んだ。
レイルは、もっと高い塔に登った事があるせいで、それほど何も思わなかった。
監視員は２人を見て、微笑む。

「どうだ、君達。なかなかいいものだろう」

「そうですね！」ケーナは嬉しそうに言う。
まるで、観光旅行でもしているようだ。実際、前回の試練よりは旅行っぽかった。
国が管理している施設なので、この前の廃墟の様な危険は少ないと見られたからだ。

奥まった入口には、もう一人槍を持った番兵がいた。

監視員がその男に話しかけると、番兵はするりと入口から退いた。

「しかし、君達だけで大丈夫かね？　許可は、確かに貰っているけど。」

「は、はい。何とか。」レイルは、しどろもどろに応えた。本当は、誰か付いてきてほしいものだが、色々と問題が出てくるので、出来ないのだ。

要は、入ってはいけないところに2人は入るつもりだった。

内部潜入（前書き）

いよいよピラミッドの中に入るケーナとレイル。

内部潜入

ピラミッドの通路は、この前の神殿と比べて狭かった。
しかしところどころに電燈があり、この前の様に暗闇を心配する必要は今のところない。
モンスターもいないし、内部はなかなか綺麗にしてある。

さすが人間が管理しているだけある。
色々なところに手が行き届いている。これなら安心して進む事が出来る。

通路は下に向っていた。
デルアラス王家の者が眠っているのは、砂漠の砂面を通り超えた地下だそうだ。

「ふーん、思ったより。不気味じゃ無いね！」

ケーナは、頭の後ろに手を組みながら背伸びして言った。
レイルも同感だった。しかし、もう少し進むと雰囲気も変わるかもしれない。

歩き続ける事２０分弱。通路が急に広くなった。
レイルは辺りを見まわす。
石壁に、様々な絵が描かれている。

鳥の顔を持つ人間が杖を持っている姿。
猫のような生き物。
謎の植物。
巨大な目。

どうやら、いよいよ王家の墓の本体に近づいてきたようだ。
壁に掛けられた松明がゆらゆら照らす部屋を2人は進む。

鉄製の扉で閉じられた部屋が幾つも姿を現した。
きっとミイラが眠っているのだろう。或いは財宝がしまってあるのかもしれない。

しかし、これらの扉を開ける必要は全くなかった。
レイルが向かうところは、ここからまだずっと奥にあるのだ。

更に、階段を降り、部屋を進む事を数度繰り返す。
そして、遂に地下4階と思われるところまでやってきた。

目の前には立て札が置いてある。
ケーナは、それを見ると、声を出してレイルに内容を伝える。

「この先危険、関係者意外絶対に侵入するべからず。入ったところを見られた場合、犯罪とみなしデルアラス国の裁判にかけられ然るべき罰を受けてもらう。……だって。」

それを聞いて、レイルはちょっと怖くなった。

禁断の領域（前書き）

禁断の地下四階に進むレイル達。

「灯りが点いてないね本当に誰も入らないみたいだね」

ケーナが、そう言って。レイルの方を向く。
言葉にしなくても、冥術を使ってほしいと言っている事はわかった。

「デリアだね。うん、まかせてよ」

レイルは、この前の様に光の球を作りだした。
光の球は、地下四階の暗闇を照らし出す。

「こっからは、慎重にいかなきゃね。モンスターが出るかもしれないし。」

ケーナは、携えた剣を抜いた。
いつでも、対応できるようにするためである。

「ケーナ、足元や天井にも気をつけてね。ノエリーが言ってたからさ」

「ああ、トラップの事ね。うん、何だかヒヤヒヤするなあ」

王家の墓の禁断の領域には、盗賊などの侵入者達を寄せ付けぬように様々な仕掛けが張り巡らされていると言う。とにかく、非常に危険な場所なのだ。監視している兵士たちですらその構造は熟知していないらしく、未知な部分も多い。また、ここに入って死んだ人間は数多く、彼らの怨念は地下の闇に漂っており、侵入者を仲間へと誘うと言う。

そんな場所に、レイルとケーナはたった二人だけで入って行った。他人には子供2人がこんなところに入ると言うのは信じられない話だ。

しかし、彼らには何か底知れぬ自信があったのだった。

今の2人なら何とかなる。

ケーナも、レイルも心のどこかにそんな気持ちが芽生えていた。

迷宮（前書き）

禁断の地へ侵入したケーナ達だが……

迷宮

ゆっくり、ゆっくりと2人は足を進める。
道は入りくねっていてかなりややこしい。迷路の様だ。
あちらこちらに十字路があるため、どこにいるかも判断が難しかった。
適当に歩いていては方向感覚が狂って道に迷うことだろう。
これが、禁断の地の罠の一つとも言えそうだ。
しかし、これに対してはレイルとケーナにも対策はあった。
ノエリーが、ある程度の構造を地図にしてれたのだ。
これで、基本的に道に迷う危険は薄れた。
しかし、罠の位置までは完全に把握していないので、そちらはかなり注意しなくてはならない。

「静かだね……」
ケーナはひそひそと言う。レイルはそれに頷いた。
「モンスターは、いないのかな？　とにかく、気をつけないと。」

地下5階への階段までは何とか辿り着いた。
目的地の地下8階はまだ遠い。地図で見ると、内部は更に広くなっていた。

変わらぬ巨大な迷路が続く。
足元に何かの骨が落ちていた。ここで死んだ人の物だろうか？

二つ目の十字路に差し掛かったところで、ケーナが何かに気付いた。

「うん？　あそこの地面、何だか怪しいね……」

レイルも、彼女が指差したところを見る。
確かに、土に四角形の線が浮かび上がっている。

「罠かもしれないね。どうしよう？」

「うん……ノエリーの地図にも書いてないね。とりあえず、触るのは危険だしこの道は避けた方が良いかもね。」

ケーナの判断で、一旦十字路を引き返し。戻った先の最初の十字路を右手に進んだ。
しかし、この判断が2人に大きな問題を引き起こす。

罠（前書き）

罠を看破したつもりの２人だったが……

罠

その通路には、一見何も罠の形跡は無かった。
2人は、ここで若干の油断をしてしまった。

古代文明が造り上げたトラップは、予想を越えたものだったのだ。
彼らがある部分を通過することで働くセンサー式のトラップが起動する！
前方の十字路にあったトラップはここに誘導させるためのダミーでもあったのだ。

「うわっ！？」

レイルが驚いて声を出す。
それもそのはずだ、急に辺りが真っ暗になったのだから。

「うそ！？」ケーナも戸惑う。
「どういうことなの？　＜デリア＞が急に消えるなんて！」

レイルは暗闇の中、困った顔をした。

「これって、多分＜封術＞だよ。どうやら僕達罠にかかったみたいだね」

「しまった！　判断が甘かった。どうしよう、＜デリア＞はもう一度使えないの？」

「やってみるよ。……」

レイルは、＜デリア＞を使おうとした。
しかし、だめだった。何も起こらない。

「どうやら、冥術が使えなくなってるみたいだ。ケーナ、松明を使うしかないよ。」

「そっか。多めに冒険セット持ってきて正解だったね。」

ケーナは、松明の一本を取り出すとに火をつける。
＜デリア＞ほどではないが、辺りは構造が見えるほどには照らされた。
２人はまた歩み出した。

「なかなか、手ごわそうだね」レイルは、ケーナの後ろで言う。

「うん、気を引き締めないと」

しかし、そう言ったのも束の間。
２人は更なる罠の連鎖にかかる事になる。

罠罠（前書き）

冥術が使えなくなったレイル。
次に待ち受けるのは？

罠罠

松明を手に持つケーナを先頭にして通路を進む。
次々と曲がり路があったが、ノエリーの地図を信じてそれに従う。

しかし、それがあだになった。
松明の火が巻き起こす熱は、新たなる罠の引き金になる！

「う、わっ！？」

突然地面に穴が開いた！
２人を丸ごと吸い込む大きな穴だ。

２人は、その穴に、落ちた。
あああああああああという声と共に落ちていく。

かなりの高さからの落下だ。
このまま落ちたら、死んでしまう！

ガキィン！

ケーナは、とっさに手に持つ剣を壁に向って思い切り突き刺しぶら下がる。

そして、レイルの手を掴んだ！　万事休すである。

「大丈夫!?　レイル。」

「うん、大丈夫だよ。でも、どうしようかな?」

レイルは、恐る恐る下を向いた。
穴の底は暗くて見えない。吸い込まれるような暗黒だ。
しかし、何かの音がする。

ぽちゃん
ぽちゃん

水の音だ。水が水面に落ちる音だ。
それもかなり近い。ひょっとすると、下は水だまりになっているのかもしれない。

「こ、ここから、落ちても大丈夫かもしれないよ。下が水なら衝撃も吸収されるかも。」
レイルはケーナに言った。

「そうだね、このままぶらさがっててもどのみちダメそうだ。よし！　それじゃあレイル、壁際に擦りつきながら降りて行ってよ！」

「うん！」

レイルは、ケーナの手を離すと、側面の壁に飛び付き、無理やり手足を引っかけて落下スピードを軽減させながらズルズルと下に向う。

水面でドッキリ（前書き）

落とし穴に落ちた２人は更に大変な目に！？

水面でドッキリ

ザブゥン！

レイルの予想通り、穴の底は水たまりだった。
正確には、地底湖と言った方が正しいだろうか。

足をバタつかせながら、レイルは試しに＜デリア＞を使ってみる。
光の球は再び現れた。どうやら、ここまでは冥術封印の罠の効果は無いらしい。
辺りが照らされる、光球の映し出す部分には陸となる部分は無かった。

「ケーナ、どうやら大丈夫みたいだ！　普通の水だよ！」

ザブウン！
ケーナも続いて水に入った。装備が重いせいなのか、それとも彼女が重いのか、水しぶきが一際大きかった。

「プハー！　砂漠の地下にしては水が多いなぁ。オアシスから引いてるのかな？」

「わかんない。とりあえず、どうにかして出口を見つけないと。」

「そうだね、レイル。けど、ここって何だか嫌な予感がしない？
何か、ここに落とされてそれで終わりって気がしないって言うか……」

「まさか……」

ケーナの悪い予想は当たっていた。
２人にゆらゆらと近づく何かがいる！　しかも、１つでは無い。
囲まれている！

「うわわっ！」
レイルが慌てる。

「これは……砂漠ワニ！　こんなところにいるなんて……」
ケーナは、正体を見破った。しかし、この状態では、上手いこと剣を振るうのは難しかった。増してや数が多すぎる。

このままだと、ワニにおいしく食べられる事だろう。
２人にとって最大のピンチが訪れたように見えた。

ワニの氷漬け（前書き）

ワニの大軍に水中で出くわしたレイル達だったが……

ワニの氷漬け

しかし、レイルには冥術があった。
とっさに、彼が放ったのは氷の冥術だ。

「抗うものよ、凍てつけ！　＜ラムサライズ＞！」

ビシイッ！

レイルの前方の水がワニ共々に凍りつく！
水面にできた氷は分厚く、同時に陸地も出来た。

「ケーナ！　まずは氷の上に乗ろう！」

「よしきた！」

2人は大慌てで氷の上に泳ぎ着く。
これならば、ケーナの剣も容易く振るえるだろう。

残ったワニ達はケーナ達に近づく。
しかし、状況は2人に有利になっている。

「とにかく、このワニを一掃しないことには出口も探せないね。」

「うん、とりあえずもう一度＜ラムサライズ＞で凍らせてしまおう。」

ビシイッ

レイルの二度目の冥術で、ワニ達は全て凍りついた。
氷の一部を割って水の中を見てみたが、他にはもういないようだ。
ようは全滅である。ワニ達にはちょっと申し訳ないなと思ったレイルだった。

「よし、出口をさがそうよ。」

ケーナは、剣を鞘に納めて泳ぐ態勢に入る。
水中のどこかに出口があると見たのだ。

結局、その予想は、当たっていた。
潜ったケーナが再び水面に上がった時には笑顔が零れていた。

「あったよ！　どっかに通じる穴みたいなのがある。ちょっと泳がなきゃいけないけど大丈夫？」

「うん、泳ぐのは割と得意なんだ。冥術もあるし、何とかなるよ」

張った氷の隙間から、２人は水に飛び込んだ。

水中に身を泳がせて（前書き）

水にもぐって出口を探す2人。

水中に身を泳がせて

オアシスから引いているのか、水の透明度はすこぶる高い。
＜デリア＞の光球に照らされた水中は、まるで水が無いようで、2人は、空中を浮かんでいるような錯覚にとらわれそうになった。

2人とも泳ぎは得意だった。
砂漠に住むケーナが、泳げるのは意外である。彼女はオアシスなどで泳ぐ練習をしていたのだ。

水深10メートルはあるだろう。深い地底湖だ。
ところどころに、美しい魚が泳いでいる。

ケーナの言った通路らしき穴が見えてきた。
特に水の乱れる様子もなく穏やかだ。
2人は、足をばたつかせてそこに向うと、四角形の通路に入り泳ぎ進んだ。

特に、危険な生き物もおらず、暫く進むと、遂に、空気のある場所に辿り着いた。
ケーナとレイルはそこに顔を出すと、ぷはーと息を吸った。

「よかったぁ。どうやら、道があるみたいだね！」

「うん。」

2人が水から上がった先には通路があった。
どういう役割があるのかはわからないが、どこかに通じているようだ。
2人はその道を慎重に進む。

持っていた道具は、皆濡れてしまった。
松明（たいまつ）は湿ってしまったから暫くは役に立たないだろう。

再び罠にはかかるまい。
2人はそう決意していた。次にかかれば、命は無いかもしれないと思ったからだ。

王家の墓の冒険はまだまだ続く。

銀の部屋（前書き）

謎の通路を発見したケーナ達は、それを進む。

銀の部屋

その通路は一本道で、王家の墓内部と同じ素材の壁で覆われていた。
物音はせず、ただ、２人の土を踏む音が響いた。

「これ、どこに続いてるんだろう……」

「そうだね、どこかには出ると思うんだけど。結構意外なトコに出ちゃうかも知れないね。」

あの落とし穴は深かった。
少なくとも、地下４階よりはずっと下の階に位置するのだろう。

ノエリーの地図にも、ここは描かれていない。
そもそも、まだ濡れているので開く事が出来なかった。
とにかく２人に出来る事は前進だった。

何かの目的で作られた通路なのだろうか。
罠は見当たらない。しかし、２人は慎重さを崩さなかった。

「あっ、道が開けた！」

ケーナがそう言うと、目前の壁は切れて大きな部屋が姿を現した。
壁には、銀で描かれた豪華な古代絵が、昔の姿のまま残っている。

「もしかすると……ここって。」

レイルは手ごたえの様なものを感じた。
もしかすると、運良く目的の場所に辿り着いたのかもしれない。
そう思った。

銀は、霊を退ける効果がある。
つまり、この階のどこかには、ノエリーが言う強力な霊の集まる部屋が存在する可能性があるのだ。

「ケーナ、意外と近いかもしれないよ。僕ら近道をしたのかもしれない。」

「うん！」ケーナも同感だった。
「目的の部屋を探そう！　そして、上手く脱出しないとね！」

棺桶の部屋（前書き）

ケーナ達は、謎の階層を探る……

棺桶の部屋

銀の絵が壁に無くなった先には、幾つもの部屋があった。
得体も知れない、何かをレイル達は感じた。

「何だか、嫌な予感がする……」

「ちょっと、恐がりだなぁレイルって。さっきのワニの時は勇敢に見えたんだけど、幽霊とかは恐いの？」

「うん、昔司祭様からオバケの話聞かされて、夜眠れなくなった事があるんだ」

「それで、今でも恐いんだ。へー、子供っぽいなぁ。でも、分かってると思うけど、その幽霊に憑りつかれるんだからね、レイルは」

「……」

2人は、部屋を1つずつ見て回る。
それぞれの部屋には、棺桶が横向きに並べられていた。おそらく、中には過去に死んだ者達が眠っているのだろう。しかし、これらの部屋は目的の場所では無い。

ノエリーの地図を再び開く。
構造を照らし合わせると、どうやら目的の階層には間違いないようだった。

部屋の一つに、赤い丸がうってある。ここが、悪霊の住まうところなのだろう。

「もうすこしだね！　ちょっと、疲れてきたよ。」

「レイルったら、スタミナ無いわね。」

「さっき冥術使ったからだよ。結構あの冥術は疲れるんだ。」

「ふーん。まあ、罠があるかもしれないし、ゆっくり行きましょうか。」

休憩を入れながら、進路を辿る。
目的の場所に近ずくに連れ、何だかさっきの得体の知れない感覚が強くなっているようにレイルは感じた。

そして、その瘴気の様なものが一際強くなった時、他の部屋とは違う、独特の文様に囲まれた部屋の入口が目の前に現れた。

「ここが……悪霊の住まう部屋……」

レイルは、緩んでいた気を引き締め直した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0853v/

砂塵りのケーナ

2011年11月22日01時15分発行